

資料紹介

「明治三十七、八年戦役ニ於ケル

野戦砲兵第十一連隊ノ戦歴

旅順要塞攻囲戦ノ巻」(中)

平井 誠

一 資料の内容

本号では、前号に引き続き、第三編第一章から第六章までを紹介する。

第一編 動員下令ヨリ対敵行動ニ移ルマデノ状況

第一章 動員実施ノ状況

第二章 待令間ノ状況

第三章 船舶輸送

第四章 上陸後ノ行軍

第二編 旅順要塞前地ノ諸戦闘

第一章 南沙河口付近ニ於ケル攻囲戦線ノ編成前

第二章 六月廿六ヨリ七月廿五日ニ至ル間ノ状況

第三章 七月廿六ヨリ二十八日ニ至ル大白山攻撃

第四章 七月三十日ノ前進

第五章 大小狐山ノ攻撃

第三編 旅順要塞戦闘

第一章 攻撃準備

第二章 旅順要塞第一回総攻撃

第三章 八月二十五日ヨリ十月二十五日ニ至ル状況

第四章 旅順要塞第二回総攻撃

第五章 第二回総攻撃結了ヨリ第三回総攻撃開始迄ノ状況

第六章 旅順要塞第三回総攻撃

第七章 第三回総攻撃以後十二月十七日ニ至ル状況

前号掲載

本号掲載

第八章 東鶏冠山北砲台ノ攻撃  
第九章 十二月二十日ヨリ三十一日ニ至ル状況  
第十章 明治三十八年一月一日ヨリ旅順開城ニ至ル状況  
第十一章 旅順開城及其ノ後ノ状況

第四編 給養及衛生

第一章 給養

第二章 衛生

附録、附表、附图(附图は略されている)

二 今回の紹介

第三編 旅順要塞戦闘

第一章 攻撃準備

乃木希典率いる第三軍(第一、九、十一師団)は、重砲陣地の構築、交通網の設備等、旅順要塞の攻撃に向けて準備を進めた。旅順要塞は、堡塁砲台七十一個、火砲四百四門(備砲も含めると五百五十四門)、兵力四万七千人に達する堅固な要塞であった。明治三十七年八月十六日、第三軍は、無益な戦いを避けるため、露軍へ勸降状を送った。これに対し、露軍のステッセル將軍は、答書を不要と主張したが、スミルノフ中将が、その必要性を説いた。しかし、その答書は、露国の名誉と品格にかけて、降伏を拒絶するという内容であった。こ

こに、旅順戦は、決定的となった。

## 第二章 旅順要塞第一回総攻撃

第三軍の兵力は、露軍と同程度であった。しかし、火砲は三百七十八門に過ぎなかった。八月十九日、第一回総攻撃が開始された。第三軍の攻撃目標は、二龍山から東鶏冠山とされた。その内、第十一師団の攻撃目標は、東鶏冠山北砲台とされ、左翼と右翼の二方面から攻撃した。野戦砲兵第十一連隊は、第一大隊（第三中隊欠）が大孤山西南麓、第二大隊が王家屯北方丘阜、第三中隊が小孤山上に位置していた。二十日以降、第二大隊が東鶏冠山北砲台から東鶏冠山砲台を、第一大隊（第三中隊欠）が東鶏冠山砲台とその東南を砲撃した。二十二日、右翼地区隊の第十二連隊は、東鶏冠山東南砲台を、左翼地区隊の歩兵二十二連隊は、東鶏冠山砲台を攻撃した。野戦砲兵は、東鶏冠山を射撃し、これを援助した。この日、第九師団が盤龍山の二砲台を占領した。二十三日、露軍が回復攻撃を実施するが固守した。二十四日、望台を占領することなく、第一回総攻撃は終了した。野戦砲兵第十一連隊の消費弾薬は、榴弾千九百九十発、榴霰弾九千六百五十九発に上り、平常演習の四年分に達した。第三軍全体の死傷者は、一万四千六百八十一名、消費弾薬は、榴弾三万十発、榴霰弾四万八千三百七十三発であった。

## 第三章 八月二十五日ヨリ十月二十五日ニ至ル状況

### 第一節 八月二十五日ヨリ九月十八日ニ至ル状況

八月二十九日、第三軍司令官より、弾薬の節約と衛生について訓示を受けた。第一回総攻撃で弾薬の多くを消費していた。また、当時脚気が流行し、麦飯の給養を奨励するとともに、昼飯には重焼麴麵を用いた。三十一日、第三軍司令官より、正攻法を実施すること、損害を防ぐため疎散の隊形をとること、将校の死傷を防ぐため、必要限度の将校が先頭に立つこと、などについて訓示を受けた。正攻法とは、攻者が、防者の有効射程に入ってから後の前進、突撃準備、突撃等を、全て攻撃築城の掩護下に行う攻撃方法である。そのため、まず対壕

作業に着手した。九月一日、第十一師団長より、「全滅ニ全滅ヲ重ネ、補充ニ補充ヲ以テシ、而シテ初テ国家ノ戦捷ヲ期スベキナリ」と訓示を受けた。また、十一日、第三軍司令官より、「旅順陥落ノ遅速ハ、全般ノ戦局ニ関スルコト重大ナリ」と訓示を受けた。第二回総攻撃に向け、士気が盛り上げられた。しかし、九月十九日、第九師団が、龍眼北方堡壘を攻撃するまで、大きな砲撃はなかった。

### 第二節 九月十九、二十日、第一、第九師団ノ攻撃援助

正攻法を実施するための対壕作業は、第一師団が水師營南方堡壘に向け、第九師団が龍眼北方角面堡に向け、第十一師団が東鶏冠山砲台から東鶏冠山北砲台に向けて行われた。九月十七、八日頃になると、第一、九師団の対壕は、約五千メートルの距離まで接近し、再び一戦を交える状況となった。そこで、十九日、第一師団が203高地、海鼠山堡壘、水師營南方堡壘を、第九師団が龍眼北方角面堡を攻撃した。第三軍が、203高地と海鼠山の占領を目指したのは、湾内に止まっている露軍艦隊を壊滅させるためには、背後の203高地高地と海鼠山を占領することが不可欠だったからである。野戦砲兵第十一連隊は、その援助として、東鶏冠山砲台から北砲台を射撃した。十九日の夜は、第九師団方面での戦闘が激しかった。この攻撃で、龍眼北方角面堡、水師營南方堡壘、海鼠山堡壘の占領には成功したが、ついに203高地を占領することはできなかった。二十日、攻撃は終了した。第十一師団を除く死傷者は四千五百名、消費弾薬は六千八百十四発であった。

### 第三節 九月二十一日ヨリ第二回総攻撃ニ至ル間ノ状況

第三軍の対壕作業に対して、露軍は探照弾を打ち上げ砲火を加えた。そこで、十月一日より、露軍の探照弾に対する狙撃を開始した。少数の射撃では、到底露軍の機械を破壊できないため、曳火弾を用いた。また、この日から、第三軍は、有名な巨砲二十八叢砲による砲撃を開始している。しかし、銃製弾薬の欠乏は、大きな課題であった。十月五日、弾薬の製造力を高めるため、銃製榴弾

なるものを創意した。しかし、効力は極めて微弱で、戦場の光景を彩色するに過ぎなかった。また、不発が多く、着弾の観測が不便であったため、信管の構造に改良を加え、ようやく多少の効力を収めた。十五日、「堅忍持久益々奉公ノ誠ヲ竭シ、以テ終局ノ目的ヲ達スルコトヲ努メヨ」との勅語を受けた。また、二十一日、野戦砲兵第十一連隊連隊長より、将校の戦死が増加したためか、部下の功績を怠りなく筆記しておくこと、戦用器具等の手入れや保存をしつかりすること、馬匹を適当に使用することについて注意を受けた。二十九日、昭憲皇后より第三軍へ、御調製の巻軸包帯を下賜されたとの知らせを受けた。

#### 第四章 旅順要塞第二回総攻撃

##### 第一節 攻撃準備

第二回総攻撃の前に、第十一師団長より、歩兵と砲兵の連携について、訓示を受けた。陣地に依拠する敵を攻撃するには、まず砲兵が構築物を破壊し、その後歩兵が突撃するのが一般的である。しかし、露軍の構築物は堅固であるため、砲兵の成果を待つことができない。そこで、歩兵が機をみて突撃するようにとの訓示であった。また、十月三十日、野戦砲兵第十一連隊長より、「現在所有弾数ノ外、他ニ補給ヲ受クルノ途ナシ」として、弾薬の節約に努めるとともに、最後の時機に至っても、一門平均約三十発は残しておくようにと訓示を受けた。第二回総攻撃に臨む第三軍の兵力は、将校以下二万八千九十名で、定員の三分の二であった。また、砲数は、四百二十七門であった。その内、二十八砲は、十八門であった。

##### 第二節 攻撃実施

十月二十六日、二十八砲の砲撃を機に、第二回総攻撃を実施した。(当初は、第一、九師団のみであった。二十六日、第九師団が鉢巻山を占領した。第十一師団が加わっての総攻撃は三十日からであった。)三十日、第一師団は松樹山、第九師団は二龍山からP砲台(二戸砲台)、第十一師団は東鶏冠山北砲台から東鶏山砲台を攻撃した。第十一師団は、一時、東鶏山砲台を占領したが、露軍

の逆襲で放棄するに至った。三十一日、東鶏冠山北砲台の爆破を試みるが、威力が薄弱で占領できなかった。十一月一日、第二回総攻撃は、第九師団がP砲台(二戸砲台)を占領したのみで終了した。第二回総攻撃は、第九、十一師団方面を中心とした。第一師団は、松樹山を攻撃したに止まった。そのため、第三軍の損害は、三千を越えず、第一回総攻撃の五分の一であった。しかし、消費弾薬は、二万三千三百四十三発に上った。

#### 第五章 第二回総攻撃終了ヨリ第三回総攻撃開始迄ノ状況

十一月八日、韓国より慰問大使として権重頭が来軍した。韓国と日本の関係を「唇齒ノ関係ニ属シ、両国ノ厚誼兄弟モ營ナラズ」とたとえ、日露戦争の目的を、「大日本皇帝陛下カ、一ハ自国ノ武威ヲ輝カシ、一ハ支那ノ独立ヲ鞏固ニシテ、東洋ノ大局ヲ維持シ、以テ信徳ヲ世界ニ示」すためと勅語を伝えた。日露戦争は、日本とロシアが、満州・朝鮮の覇権をめぐる争いであり、韓国の置かれた苦しい境地が察せられる。二十二日、従来、第九師団が守備してきたP砲台(二戸砲台)を、第十一師団歩兵第四十三連隊(一大隊半欠)などが守備することになった。二十三日、第十一師団の新山大佐が、東鶏山中腹散兵壕を攻撃した。一時、これを占領したが、敵の逆襲により、放棄するに至った。

#### 第六章 旅順要塞第三回総攻撃

##### 第一節 攻撃開始前ノ状況

十月十五日、露軍の第二太平洋艦隊(バルチック艦隊)は、本国のリバウを出航し、旅順に向かった。日本海軍は、一年もの間、旅順港にいる露軍の第一太平洋艦隊を封鎖してきた。しかし、十一月下旬になっても、第三軍による旅順の攻撃が成功しなければ、露軍の第二太平洋艦隊(バルチック艦隊)を迎撃する準備のため、旅順港の封鎖を解かなければならなかった。そうなれば、露軍の要塞や艦隊は、再び勢力を盛り返すであろう。また、満州軍と本国との交通も不安を生じるようになる。海軍の強い要請もあり、第三軍は、早急に旅順要塞を攻略する必要があった。そこで、第三回総攻撃が準備された。二十三日、

「成功ヲ望ム情甚ダ切ナリ」との勅語を受けた。これに対して、第三軍司令官乃木希典は、「速ニ軍ノ任務ヲ遂行センコトヲ期ス」と奉答した。

## 第二節 攻撃実施

十一月二十六日、第三回総攻撃が開始された。第一師団は松樹山砲台、第九師団は二龍山砲台、第十一師団は東鷄冠山北砲台と東鷄冠山砲台の占領を目指した。この日、約千八百発の弾薬が補充されたため、連隊段列にあつた弾薬を全て分配した。これにより、各中隊の弾薬は、一門平均九十一発となった。戦闘が始まると、野戦砲兵は、歩兵を援助するため、砲撃を加えた。この夜、歴戦者の中より選抜された白樺隊が、夜襲をかけたが失敗した。二十六日から二十七日に亘る数度の正面攻撃も失敗した。そこで、第三軍軍司令官乃木希典は、攻撃目標を203高地に転換した。二十七日、第三軍は、第一、七師団（新たに第三軍に編入）を以て、203高地を攻撃し、十数回に亘る突撃の後、十二月五日、占領に成功した。第三回総攻撃における第三軍の損害は、死傷者一万五千五百八十二名、消費弾薬四万一千八百四十発に上った。特に、第七師団は全滅に近い損害を蒙った。203高地を占領した第三軍は、そこから旅順港にいる露軍の第一太平洋艦隊を砲撃し全滅させた。203高地の占領は、日露戦争の勝敗に、大きな影響を与えた。

### 凡例

- 一、文字は原則として常用漢字を用い、常用漢字にないものは正字を用いた。但し、人名・地名は表記のまま記した。
- 二、誤字・脱字は（ママ）（カ）と傍注、虫損・汚損などによって文字が判読できない箇所は□で示し、平出は一マスあけとした。
- 三、読みやすくするため、適宜読点を施した。
- 四、死傷者数等、数値については、参考文献等と異なる部分もあるが、原文のまま解説・翻刻した。

### 参考文献

- ・「旅順降伏記念帖」『日露戦争画報』第十三巻臨時増刊号 博文館 一九〇五年。
- ・陸上自衛隊第13師団司令部四国師団史編纂委員会編 『四国師団史』第13師団司令部 一九七二年。
- ・客野澄博 『二十二連隊始末記』 愛媛新聞社 一九七二年。
- ・愛媛県史編纂委員会編 『愛媛県史』近代（上） 愛媛県 一九八六年。
- ・河合 勉 『愛媛の郷土部隊』 愛媛文化双書刊行会 一九八八年。



第三編 旅順要塞戦闘

第一章 攻撃準備

我第三軍ハ、已ニ旅順要塞本防御線前ノ地区ヲ確實ニ領有シ、攻城材料、彈藥等、略々予定ノ如ク到着シ、重砲陣地ノ構築、交通網ノ設備略ボ完成セシカバ、今ヤ最後ノ鉄槌ヲ加ヘ、本防御線ニ向ヒ強襲ヲ断行シ、一挙ニ要塞ヲ蹂躪セントスルノ機運ニ際会セリ、

我連隊ハ、先二人馬ノ補充ヲ受ケタルヲ以テ、戦闘力充実シ、彈藥ハ、稍々不足セリト雖、予定ノ如ク数日ニシテ旅順陥落スルトセバ、略意ノ如ク射撃ヲ実施スルヲ得ベク、掩体ノ構築、射撃ノ要領、其ノ他戦闘動作ニ関スル訓練ハ、幾回ノ経験ニヨリ、著シク進歩シタルヲ以テ、敵ガ如何ニ金城鐵壁ノ城塞ニ掘リ頑強ニ抵抗スルモ、尚能ク歩兵ト協力シテ敵ヲ圧倒スルヲ得ベシ、茲ニ於テ諸種ノ手段ヲ<sup>（足カ）</sup>用シ、予メ陣地及進入路ヲ偵察シ、工事ノ方法、射撃ノ計画、連絡通信ノ方法ヲ定メ、以テ戦機ノ熟スルヲ待テリ、

当時旅順要塞ハ、未ダ完備スルニ至ラズト雖、陸正面ニ於ケル堡壘砲台ノ數七十一個ノ多キニ達シ、之ニ備フル火砲ハ大小各種合計四百四門ヲ算シ、之ニ海正面及中央固部ノ備砲ヲ合スル時ハ、其ノ數實ニ五百五十四門ニ達ス、而シテ之ヲ守ルニ三十一大隊ノ歩兵ト、野戦砲七十門、要塞砲兵三大隊、海兵団ノ兵員三千五百、義勇兵三千、其ノ他各種ノ兵力ヲ總合シ、其數員實ニ四万七千ノ多キニ達ス、難攻不落ト云フモ、敢テ誇言ニ非ザルベシ、

八月十六日、我軍ハ、山岡參謀（砲兵少佐ナリシモ、後中佐ニ進ミ、奉天会戦ノ際、両眼ヲ負傷シテ盲目トナリ、功ヲ以テ大佐ニ進ミ、今尚生存セラル）ヲシテ、左記要旨ノ勸降伏ヲ露軍ニ致サシム、

露国ノ軍隊ハ、勇敢ニ防戦スルモ、旅順ノ陥落ハ到底免レザルベシ、因テ攻囲軍司令官ハ、茲ニ無益ノ殺害ヲ避ケンガタメ、開城ノ予備談判ヲ開始センコトヲ勧告ス、

之ニ対シ「ステッセル」將軍ハ、答書ヲ送ルヲ要セズト主張セシモ、「スミルノフ」

中將ハ、其ノ必要アルヲ述べ、左ノ如キ答書ヲ送り、其ノ勸降ヲ拒絶セリ、露国ノ名譽ト品格トハ、開城ノ条件ニ関シ、予備談判ヲ開始スルコトヲ許サズト、

第二章 旅順要塞第一回総攻撃

此ノ時ニ於ケル我軍ノ兵力左ノ如シ、  
第一、第九、第十一師団ノ全部（第九、第十一師団ノ騎兵ハ、一中隊ヲ旅順ニ留メ、他ハ北進ス、）

後備歩兵第一、第四旅団  
後備工兵一大隊

野戦砲兵第二旅団

九珊乃至十五珊重砲百九十八門（内曲射砲百二十八門）

是ヲ前章露軍ノ兵力ニ比較スルニ略相似タリ、而モ其ノ砲兵ニ至リテハ、攻城野戦全砲兵ヲ合シテ三百七十八門ニ過ギス、此ノ如キ兵力ヲ以テ、難攻不落ノ城塞ニ向フ我軍ノ任務モ、亦重大ナリト云フベシ、

八月十七日攻撃ニ関スル師団命令ヲ受領ス、其ノ要旨左ノ如シ、

第十一師団命令 八月十七日午後二時 於林家庄兒

軍隊区分 一、軍ハ、明十八日ヨリ総攻撃ヲ開始ス、

右翼地区隊

司令官 山中少將

歩兵第十旅団（第二十二連隊第三大隊欠）

歩兵第十二連隊

騎兵小隊長ノ指揮スル半小隊

機関砲第五（二分隊欠）

及第六、第八小隊

工兵第二、三中隊及第一

二、師団ハ、本夜攻囲線ヲ進メントス、  
第九師団ハ、我右方ヲ前進ス、  
三、攻撃担任地区左ノ如シ、  
但シ今後ニ於ケル師団主攻撃目標ハ、東鷄冠山北砲台トス、  
右翼地区隊ハ、团山子東方六百米ノ凸稜、揚家屯西方高地、五家房及東鷄冠山北砲台北麓ノ各地ニ通スル線（此ノ線ハ、第九師団ノ左翼ニ属

中隊ノ一小隊	ス)ヨリ、大孤山図上(二万分ノ一以上之ニ全
左翼地区隊	ジ)孤ノ字及大孤山前ヨリ東鷄冠山東南砲台ノ
司令官 神尾少将	南方四叉路ヲ通ズル道路ヲ含ム線マデトス、
歩兵第四十三連隊	左翼地区隊ハ、前項右翼地区隊ノ左翼線以東ト
騎兵小隊長ノ指揮スル半	ス、
砲兵第三中隊	四、右翼地区隊ハ、午後九時運動ヲ起シ、五家房東
機関砲第五小隊ノ一分隊	北方ニ於テ、第九師団ト連絡シ、北部五家屯ノ
工兵第一中隊長ノ指揮ス	南方高地ヲ経テ、大孤山西南斜面ノ稜線迄前進
ル一小隊	シ、該線ヲ固守スベシ、
砲兵隊	五、左翼地区隊ハ、右翼地区隊ニ連絡シ、大孤山東
砲兵第十一連隊(第三中	南斜面ノ稜線ヨリ、小孤山頂ヲ経テ、現在ノ陣
隊欠)	地ヲ固守スベシ、
予備隊	六、左右翼地区隊ハ、指命ノ陣地占領後、堅固ニ工
歩兵第二十二連隊第三大	事ヲ施シ、且ツ前進地区ノ諸偵察ヲナスベシ、
隊	七、砲兵隊ハ、本夜唐家屯ノ東南及西南方高地附近
騎兵第二中隊(二半小隊	ニ於テ、広ク射撃シ得ル如ク陣地ヲ構成スベシ、
欠)	八、予備隊ハ、午後九時迄ニ西竜頭ノ南方畑地ニ位
工兵大隊本部及第一中隊	置スベシ、
ノ一小隊	
衛生隊	

形及道路網ノ關係上、重砲及兵力ノ展開ニ便ニシテ、一旦之ヲ占領スル時ハ、容易ニ敵ノ死命ヲ制スルヲ得ルト云フニアリシガ如シ、

八月十八日、日没前各中隊共地形ヲ利用シ、敵ニ遮蔽シテ陣地後方ニ到リ、日没ヲ待チテ工事ヲ始め、敵ノ探照燈火箭等ニ照射セラレツツ、一方工事ヲ督励シ、一方陣地ニ侵入シテ、午前四時三十分略射撃準備ヲ完了セリ、而テ其ノ配置ハ、附圖第六ニ示スガ如ク、第二大隊ハ王家屯北方丘阜ニ、第一大隊(第三中隊欠)ハ大孤山西南麓ニ、第三中隊ハ小孤山上ニアリ、共ニ電話ヲ以テ連絡ヲ取ル、

八月十九日午前六時、各方面ノ攻城砲兵ハ一斉ニ砲撃ヲ開始シ、敵ノ諸砲台亦之ニ応シ、段々タル砲声ハ、恰モ百雷ノ一時ニ轟クガ如ク、地軸碎ケ、天柱將ニ折レンカト疑ハル、忽ニシテ我砲彈ノ効力ハ、随所ニ發揚セラレ、火藥庫爆發シ、掩蓋飛散シ、掩蔽部焼失シテ、火焰天ニ冲シ、死屍天空ニ飛ビ、要塞内部ノ混雜狼狽ノ状、歴然トシテ手ニ取ルガ如ク、其慘憺ニシテ、而テ雄大ナル光景ハ、到底筆紙ノ能ク形容シ得ル所ニアラズ、此ノ間我連隊ハ砲戦ニ参与スル異ナク、専ラ敵状ノ偵察ト工事ノ施設ニ務メ、以テ攻撃ニ関スル命令ノ下ルヲ待テリ、

同日、連隊段列附秦中尉、第五中隊小隊長ニ転ズ、

午後七時師団命令ニ基キ次ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 八月十九日午後七時二十分 於砲兵陣地

一、師団ハ、予定ノ如ク動作ス、

師団ハ、本夜五家房ヨリ大孤山前ヲ経テ、小孤山ニ亘ル線ニ攻圍線ヲ進メ、突撃ヲ準備ス、

二、各大隊ハ、明日午前九時迄二次ノ偵察ヲナシ、略圖ヲ以テ報告スベシ、盤龍山東旧砲台ヨリ東鷄冠山砲台迄ノ間ニ於ケル敵防備ノ有様(歩兵線補備砲台ノ位置、掩蔽部ノ構造及位置、副防備ノ位置、以上ノ諸物体ニシテ、本日ノ結果ニヨリ破損セルモノハ、其有様及位置ヲ記スベシ)

以上ノ地区ニ於ケル重砲及小口径砲、殊ニ機関砲ノ位置

三、本夜中ニ敵線上ニアル探照燈ノ位置ヲ明示シ、必要ニ応ジ射撃シ得ル如ク

準備スベシ、

四、予ハ、昨夜全地点ニアリ

連隊長 足立大佐

八月二十日午後二時四十分、左ノ命令ヲ下ス、

一、射撃ヲナスベキ地区ハ、左ノ如シ、

第二大隊ハ、鶏冠山北砲台ヨリ鶏冠山砲台マデノ間

第一大隊（第三中隊ヲ除ク）ハ、東鶏冠山砲台及其東南ニアル諸防禦工

事

二、各大隊ハ、午後五時二至レバ射撃ヲ開始スベシ、

三、射撃スベキ目標ハ、第一ニ掩蓋ヲ有スル散兵壕トシ、若シ機関銃ヲ発見ス

ル時ハ、先ズ之ヲ射撃スベシ、

四、本日日没迄ニ榴弾ヲ以テ破壊射撃ヲ行ヒ、夜間ハ榴散弾ヲ以テ破壊セル工

事ノ修繕ヲ妨ゲ、尚薄弱ナル築造物ノ破壊射撃ヲ行フベシ、

五、射撃速度ハ、夜間ニアリテハ一時間ニ二中隊約二、三千発トス、

此ノ命令ニ基キ、各中隊ハ、午後五時ヨリ射撃ヲ開始シ、終夜射撃ヲ続行ス、

八月二十一日午前四時頃ヨリ、第一線方面ノ銃声熾盛ヲ極ム、払曉ニ至リ、東

鶏冠山北砲台斜面脚及其ノ西南方堡壘上ニハ、日章旗植立セラレ、我兵集団シ

アルヲ見ル、（其ノ大部ハ、死屍又ハ負傷者ナリシコト後ニ判明ス）

依テ午前六時左ノ命令ヲ下ス、

一、鶏冠山北砲台ハ、我兵之ヲ占領セリ、

二、第二大隊ハ、今ヨリ東鶏冠山西南方高地（富士形砲台）及其付近並ニ東鶏

冠山ノ歩兵線ニ向ヒ射撃スベシ、

三、掩蓋ヲ有スル散兵壕ニ対シテハ、曳火射撃ハ無効ナルヲ以テ、著発射撃ヲ

行フベシ、

暫時ニシテ我歩兵ノ一時占領セシ堡壘内部ニ火災起リ、且ツ敵ノ歩砲兵ヨリ猛

烈ナル十字火ヲ受ケ損害続出、而モ後統部隊ノ来援ヲ期シ難カリシヲ以テ、斜

面脚ニ退却シ集合セリ、

午後七時三十分、左ノ要旨ノ師団命令ニ接ス、

一、師団ハ、総予備隊ヲ悉ク右翼地区隊ニ増加シ、攻撃ヲ続行ス、

二、右翼地区隊ハ、歩兵第四十四連隊ヲ以テ東鶏冠山北砲台ニ、歩兵第二十二

連隊ヲ以テ鶏冠山砲台ニ、歩兵第十二連隊ヲ以テ東鶏冠山東南砲台ニ対シ

突撃ヲ実行ス、

依テ第一大隊ヲシテ歩兵第十二連隊ノ攻撃ヲ、第二大隊ヲシテ歩兵第四十四連

隊及第二十二連隊ノ攻撃ヲ援助セシム、

午前十時頃、敵ノ巨弾大孤山北麓ノ師団司令部ニ落下シ、大尉參謀二名即死シ、

是レガ補充トシテ第二中隊長桑田大尉転出シ、第二中隊長平原中尉之ヲ指揮ス、

午前十一時三十分、師団命令ニ基キ次ノ命令ヲ下ス、

一、第九師団ハ、午前十一時二十分前進ヲ起シ、盤龍山東旧砲台ニ向ヒ突撃ス、

師団ハ、之ニ連繫シテ攻撃ヲ復行ス、

右翼地区隊ハ、歩兵第四十四連隊ヲ以テ東鶏冠山北砲台ノ南方ヨリ、歩兵

第二十二連隊ヲ以テ東鶏冠山砲台ニ向ヒ突撃ヲ実行ス、

二、第二大隊ハ、主力ヲ以テ歩兵第四十四連隊ノ攻撃ヲ援助シ、一部ヲ以テ歩

兵二十二連隊ノ突撃ヲ援助スル如ク射撃スベシ、

第九師団突撃ノ進捗ヲ見バ、射撃ヲ開始スベシ、

三、第一大隊ハ、第二大隊ノ射撃ヲ見ハ、射撃ヲ開始スベシ、

此ノ時機ニ於テハ、既ニ彈藥ノ欠乏甚ダシク、各中隊僅ニ二百発ヲ剩セルノミ、

彈藥ナケレバ砲兵ナキニ等シ、孰ゾ能ク任務ヲ遂行スルヲ得ン、即チ知ル、彈

藥ノ節用ハ絶対ニ必要ニシテ、是レガ運用ハ独り砲兵ノミナラズ、各級指揮官

ノ悉ク這般ノ真相ニ通曉スル必要アルコトヲ、

此ノ時ニ當リ、連隊段列長ヨリ、左ノ報告ニ接ス、

彈藥ハ、午後二時頃迄ニハ、榴霰彈約一小隊到着スベク、本日中午ニハ榴霰彈

三千七百発、榴彈五百発到着スル筈、

実ニ天来ノ福音ト謂フベキナリ、

午後四時二十分、敵彈第一中隊長ノ掩蓋ニ命中シ、中隊長牧大尉壯烈ナル戦死

ヲ遂ゲ、第一大隊長森本少佐重傷ヲ負ヒ、其ノ他下士卒ノ損害尠カラズ、依テ

松本中尉ヲシテ第一中隊長ヲ指揮セシメ、連隊段列長小林大尉一時第一大隊（第



三中隊欠)ノ指揮ヲ取ル、

八月二十二日、前夜来前方ニ於ケル銃声砲ハ、間断ナク喧噪ヲ極メ、光弾探照燈ノ光燦然トシテ白昼ノ如シ、超ヘテ二十二日午前一時 四十分、師団命令ニ基キ次ノ命令ヲ下ス、

一、師団ハ、愈々突撃ヲ実行ス、

二、突撃部隊ノ第一線ハ遮眼燈、其ノ他ハ燈火ヲ以テ其所在ヲ表示スル筈、

三、第二大隊ハ、前二射撃セル東鷄冠山砲台ト其左右富士形高地ノ中間旧囲壁

ニ向テ射撃スベシ、

四、第一大隊ハ、東鷄冠山東南砲台ニアル敵歩兵線ヲ射撃スベシ、

五、射撃ノ開始ハ、各突撃縦隊ノ運動ヲ起シタル時トシ、彼我ノ銃声熾ナルニ

至リ、迅速ニ射撃スベシ、

払暁歩兵第十二連隊ハ、東鷄冠山東南砲台山腹ニ取付キ、歩兵第二十二連隊ハ、

東鷄冠山砲台ノ中腹鉄條網ノ線ニアリ、

午前十時三十分、友軍ノ状況危殆ニ瀕シ、而モ歩兵ハ成敗ヲ堵シテ此難局ヲ挽

回セントスルノ情アルヲ見、猛烈ニ東鷄冠山附近ヲ射撃シ、極力之ヲ援助ヲナ

ス、

午前十時五十分、我第九師団ノ左翼ニアリシ後備旅団ノ一部ハ、盤龍山東旧砲

台ニ突撃シテ、敵ト接戦格闘スルヲ見ル、依テ之ガタメ援助射撃ヲ行フ、効果

殊ニ多シ、

午後三時四十分、師団命令ニ基キ次ノ命令ヲ下ス、

一、右翼地区隊ハ、午后四時ヨリ四時三十分ノ間ニ突撃ヲ決行ス、

二、突撃ノ方法ハ、歩兵第四十四連隊ヲ以テ東鷄冠山北砲台ニ、歩兵第二十二

連隊及第十二連隊ノ一部ヲ以テ東鷄冠山砲台ニ向ヒ、極力突撃ヲ実行ス、

三、依テ兩大隊ハ、其ノ突撃ヲ援助スル如ク、極力射撃ヲ行フベシ、

射撃ノ開始ハ、歩兵ノ前進ヲ見タル後ニ於テスベシ、

然ルニ午後四時ヲ過グルモ歩兵ハ前進ノ模様ナシ、全四時二十五分、更ニ攻撃

ヲ中止スベキ師団ノ通報ニ接ス、因テ次ノ命令ヲ下ス、

一、突撃ハ、断然中止セラル、

二、師団ハ、攻囲線ヲ若干後方ニ退クル筈、

三、兩大隊ハ、命令次第、直ニ後方ニ陣地ヲ変更スル準備ヲナシアルベシ、

但シ歩兵ノ退却ヲ援護スルタメ、尚射撃ヲ行フ準備ニアルヲ要ス、

四、連隊段列ハ、大孤山ノ後方ニ集合シ、後命ヲ待ツベシ、

此ノ退却準備ニ関スル命令ガ、如何ニ吾人ノ頭腦ニ感ジ、如何ニ士氣ニ影響シ

タルカハ、予ガ茲ニ説明スルヲ待タザルベシ、俗語ニ所謂青菜ニ塩ノ如ク、唯

稠然ト失心シ、万感胸ニ迫ツテ撫然タルモノ久シ、況シテ生死ヲ堵シテ敵壘ニ

突入シタル歩兵ノ感慨ヤ如何、

此ノ如キ悲惨ノ状態ニ於テ、將ニ初夜ニ達セントスルニ當リ、攻撃復行ノ福音

ハ、全軍ニ鳴リ響キヌ、吾人ノ喜ヤ如何ナリケン、即チ午後十時三十分ヲ以テ

次ノ命令ヲ下セリ、

一、第九師団ハ、盤龍山二砲台ヲ占領シ、本夜同所ニ工事ヲ施ス筈、

二、師団ハ、今夜中ニ盤龍山東旧砲台ニ集合シ、明払暁ヲ待チ東鷄冠山北砲台

ヨリ東鷄冠山砲台ニ亘ル線ニ向ヒ攻撃ヲ実行ス、

三、兩大隊ハ、此ノ攻撃ヲ援助スルタメ、極力攻撃スベシ、

全夜ハ只兩軍ノ重砲射撃ト時々小銃ノ一斉射撃ヲ聞キシノミ、

八月二十三日ハ、兵力ノ集中ニ意外ノ時間ヲ要シ、昼間攻撃ヲ実施シ得ルニ至

ラザリシヲ以テ、時々我歩兵ヲ側射スル敵砲兵又露出セル敵歩兵ニ対シ、屢々

有効ナル射撃ヲ加ヘタルニ止マリ、戦場ノ光景ハ彈藥ノ欠乏ト共ニ漸次寂莫ノ

感アルニ至レリ、

午後十時、師団ノ通報ニ基キ次ノ命令ヲ下ス、

一、師団司令部ヨリノ通報ニ依レバ、午後八時、第十旅団ハ悉ク盤龍山東旧砲

台ニ集合ヲ終リ、部隊ヲ整頓シテ、直ニ歩兵第四十四連隊ハ望臺ニ向ヒ、

歩兵第二十二連隊ハ北砲台ノ右方ニアル堡壘ニ向ヒ、突撃ヲ実行スル筈、

二、第一大隊ハ、東鷄冠山砲台附近ノ敵砲兵ヨリ突撃部隊ニ向ヒ射撃ヲ加フル

ヲ見バ、之ニ向ヒ射撃ヲ行フベシ、

三、第二大隊ハ、歩兵火ノ熾ナルヲ見バ、午後射撃セシ機関銃ノ位置ニ射撃ヲ

実施スベシ、其速度ハ尋常射トス、其ノ他ノ目標ニ対シテハ、彼我ノ識別

明力ナラズ、却テ危俛ニ付、見合スベシ、夜二入り銃声稍盛ニシテ、時々喊声ノ起ルヲ聞ク、八月二十三日夜半、露軍ハ、盤龍山東西旧砲台ノ回復攻撃ヲ実施シタルモ、遂ニ目的ヲ達セズ、却テ四百十七名ノ死傷者ヲ生ジタルヲ以テ、遂ニ其希図ヲ放棄セリ、

八月二十四日午前五時四十五分、師団司令部ヨリノ通報ニ接、其ノ要旨左ノ如シ、

只今通報ニ依レバ、我歩兵ハ望大ヲ占領セントシテ苦戦中ナルガ、望台ハ占領シ得ベキ見込アリト云フ、

払曉ニ至リ、望台及其右方ノ高地ニハ、我歩兵ノ点々国旗ヲ把持シテ匍匐スルヲ見ル、孰ンゾ知ラン、是レ皆半死半生ノ重傷者ナルコトヲ、其他前面ノ堡壘

一帯ノ斜面、我軍ノ死屍累タトシテ相重ナリ、稀ニ蠢動シテ其負傷セルヲ示スモノアリ、而モ残忍ナル敵ハ、半身ヲ露出シテ逐次之ヲ撃殺ス、有名ナル「肉

弾」ノ著者桜井中尉モ亦此裡ニアリ、当時ノ惨状ハ、該書ニ描キ尽シテ真ニ其実況ヲ穿テリ、後世旅順ノ戦歴ヲ研究セントスル者、就テ見ルベシ、

午前七時二十分、師団司令部ヨリ、望台及其右方ニ接続セル山脉ハ、我歩兵殆ド之ヲ占領セリトノ通報ニ接セシモ、其ノ真相ハ既ニ述ベタルガ如シ、

午前九時、勇敢ナル第九師団砲兵ノ一部ガ、敵前近距離ニアリテ弾薬ノ欠乏ニ苦シミツツアルノ情報ニ接シ、師団ノ命令ニヨリ、弾薬百九十七発ヲ補充ス、

此ノ日モ亦手段ヲ尽シテ攻撃ヲ続行シタルモ、生存セル将士少クシテ、攻撃意ノ如ク進捗セズ、諸般ノ計画皆齟齬渋滞シテ、遺憾ナガラ毫モ成効ヲ見ルニ至ラザリキ、

斯クテ旅順要塞第一回総攻撃ハ、僅ニ一局部ノ成効ヲ以テ満足シ、遂ニ一時攻撃ノ希図ヲ断念シ、専ラ人員及弾薬ノ補充ヲナスノ已ムヲ得ザルニ至レリ、是ガタメ二十五日左ノ命令ヲ受領ス、

第十一師団命令 八月二十五日午後二時四十五分 於姜家屯

軍隊区分 一、敵状ニ就テハ、其後大ナル変化ヲ認めズ、

右翼地区隊

長 新山歩兵大佐

歩兵第十二連隊

騎兵小隊長ノ指揮スル半

小隊

機関砲第六、第八小隊

工兵第一中隊

左翼地区隊

長 神尾少将

歩兵第四十三連隊

騎兵小隊長ノ指揮スル半

小隊

砲兵第三中隊

機関砲第五中隊

工兵第二中隊

砲兵隊

野戦砲兵第十一連隊(第三中隊欠)

予備隊

歩兵第十旅団

騎兵第二中隊(二半小隊欠)

二、師団ハ、五家房東方高地ヨリ、北部王家屯西部

高地及小孤山二亘ル間ニ於テ、攻囲線ヲ維持セ

ントス、

第九師団ハ、五家房ニ含ム線ヨリ以西ノ地区、

殊ニ盤龍山東西旧砲台ノ占領ヲ継続スル筈、

三、各地区隊ノ守備担任々務左ノ如シ、

右翼地区隊

五家房東北附近ニ於テ、第九師団ト連絡シ、北

部五家屯西南高地ヲ経テ、大孤山西南斜面ニ亘

ル線、

左翼地区隊

右翼地区隊ニ連絡シ、小孤山ヲ経テ、海岸ニ至

ル線、

四、砲兵隊ハ、現在ノ陣地ヲ占領シアルベシ、

五、予備隊ハ、龍頭南方高地ノ東側附近ニ位置スベ

シ、

弾薬大隊ハ、候家屯、林家庄、大石洞附近ニ、

輜重兵大隊及架橋縦列ハ、獵樹溝、大白山及小

龍、王唐、東溝、黄泥川、大上屯附近ニ位置ス

ベシ、

倉庫給養トス

予ハ、龍頭西南約千米突標高135ノ高地ニアリ、

第十一師団長代理 山中信義

戦闘ノ末期、土屋師団長ハ、当時流行ノ熱病ト下痢症伴発シ、一時静養ヲ要シタルニ依リ、歩兵十旅団長代リテ師団ノ指揮ヲ取ル、又歩兵第十旅団長ト云ヘ

ハ、其兵力多大ナルカ如キモ、損傷ノ結果、其実員八千名ニ充タズ、諸隊又然リ、以テ當時ノ戦況ヲ想像スルニ足ラン、

今回ノ戦闘ニ於テ連隊ノ受ケタル損害左ノ如シ、

戦死 将校一 下士卒二

負傷 将校四 下士卒三十 馬匹七

消費弾薬ハ、榴弾千九百九十、榴霰弾九千六百五十九ニシテ、平時演習用弾薬ノ四年分ニ相当ス、

第三軍戦闘詳報第七号結論ニ曰ク、

吾人ガ作為シタル強襲的攻撃計画及其ノ実行ノ適否ハ、須臾之ヲ後評ニ委ス、要スルニ吾人ハ、該テ当初左ノ迷想ヲ懷ケリ、

旅順要塞ハ、強襲ニ依リ、一挙シテ之ヲ陥落シ得ベシ、

故ニ諸般ノ準備ハ、悉ク此迷想ヲ以テ企画セラレタリ、然レドモ事實ハ之ヲ反証シ、左ノ教訓ヲ与ヘタリ、

各種ノ設備略完了シ、且守兵ノ士氣旺盛ナル要塞ニ向テ、強襲的企圖ハ殆んど成効ノ望ナシ、

況ンヤ要塞戦ニ幾多ノ経験ヲ有シ、且ツ死守ノ戍兵ヲ有スルニ於テオヤ、不幸ニシテ我ガ軍ハ一万四千八百有余ノ戦闘員ヲ失ヒ、銃砲弾ノ殆んど全部ヲ消費セリ、故ニ爾後活発ナル攻撃動作ヲ継続スルタメニハ、戦員及弾薬ノ追給ヲ待

ツヲ要スルニ至レリ、然レドモ我忠勇ナル将校下士卒等カ、十九日以来殆んど一睡ノ余暇モナク、頑強不撓決死ノ敵ニ対シ、六日間ノ久シキ、毫モ屈撓ノ状

ナク、敵弾ヲ冒シ、飢渴ヲ忍ビ、多大ノ損害ヲモ意トセスシテ、能ク奮闘シ、斃シテ後已ムノ豪氣ニ至リテハ、吾人ノ齊シク嘆頌スル処ニシテ、願クハ益々

英氣ヲ興奮シテ、以テ一日モ早く敵壘ヲ攻略シ、戦死者ノ靈魂ヲ弔ヒ、且負傷者ノ瘡痍ヲ慰メント、

此ノ戦闘ニ於テハ、敵モ亦殆んど其予備隊ヲ消尽シ、損害多大ナリシヲ以テ、我軍ニシテ尚二、三師団ノ精兵ヲ有セバ、或ハ望台附近ノ高地ヲ占領シ得

タランニ、僅ニ盤龍山ノ二堡壘ヲ占領スルニ止マリシハ、遺憾極マレリト云フベシ、今試ニ各師団ノ損害ヲ比較スレバ、左ノ如シ、

部隊号	死者	傷者	生死不明	計
第一師団(後備歩兵第三連隊ヲ含ム)	六二五	二二六七	二九七	三一八九
第九師団	九〇三	三六一五	六五四	五一七二
第十一師団	五〇八	二二二六	一二五四	三九七八
後備歩兵第四旅団	二四六	一二八四	六四二	二一七二
攻城特種部隊	二二	一四七	二	一七〇
計	二三〇三	九五二九	二八四九	一四六八一

而テ生死不明ハ、敵壘ニ飛ビ込ミ、多クハ戦死シ、一部ハ負傷後捕虜トナリタルモノトス、又其ノ負傷者ハ、一時ニ多数ヲ出シタルタメ、手当行届カス、死亡若クハ癱疾トナリタルモノ多シ、

消費弾薬左ノ如シ、

榴弾 野戦砲兵 五〇七〇

榴霰弾 野戦砲兵 三一九九五

攻城砲兵 二四九四〇

攻城砲兵 一六九七八

而テ我師団ノ得タル所ハ、俘虜僅ニ二名ノミ、又以テ要塞攻撃ノ困難ナルヲ知ルニ足ラム、

今回ノ攻撃ニ関シ、山県参謀総長ヲ経テ、第三軍ニ左ノ勅語ヲ下賜セラル、

勅語

旅順要塞攻撃開始以来、昼夜堅城決死ノ守兵ニ肉迫シ、遂ニ其ノ二壘ヲ拔キ、益々奮進ノ途ニアリト聞ク、炎熱ノ候ニ際シ、連日ノ困苦転々軫念に堪ヘズ、朕深ク汝等ノ勇武ニ信賴ス、爾將卒一簣、以テ九仞ノ功ヲ全フセヨ、

第三章 八月二十五日ヨリ十月二十五日ニ至ル状況

第一節 八月二十五日ヨリ九月十八日ニ至ル状況

第一回総攻撃ニ於テ、要塞工事ノ意外ニ堅牢ナリシト、守兵ノ意外ニ頑強ナリシヲ知り、正攻法ヲ実施スルニ非ザレバ、到底一挙ニ敵壘ヲ奪取スルコト能ハサルモノト判断シ、且我軍ノ損害甚大ニシテ、兵力ノ充実、弾薬及攻城材料ノ補給整備ヲナスニ非レハ、到底如何トモナス能ハサリシヲ以テ、残余僅少ノ兵

力ヲ以テ、取敢へズ対壕作業ニ着手シ、機ヲ見テ強襲ヲ実施スルニ決シタリ、爾後我連隊ノ任務ハ、依然旧陣地ニアリテ有利ナル遊動目標ヲ砲撃シ、我攻囲作業ヲ妨害スル敵ヲ制圧シテ、友軍ノ動作ヲ容易ナラシムルニアリキ、從ヒテ九月十九日、第九師団ノ龍眼北方堡壘ヲ攻撃スルニ至ル迄ハ、堂々タル砲戦ヲ交ヘタル事ナシ、今左ニ其ノ間ニ於ケル主要ナル出来事ヲ叙シ、以テ當時ノ狀況ヲ推測スルノ材料ニ供セン、

八月二十六日、後備歩兵第三旅団ハ、一時第三軍ニ配属セラレタリ、又山県參謀總長ヨリ、將校以下ノ補充、輸送力ノ増加、攻城材料及銃砲彈藥ノ輸送ヲ急カセツツアリトノ通報ニ接ス、

八月二十九日、攻城用トシテ、二十八珊榴彈砲ノ一支隊ハ、第三軍ニ属セラレタルノ通報ニ接シ、全軍ノ士氣大ニ興奮ス、

同日第三軍司令官ヨリ、彈藥ノ節約及衛生上ニ就テ、左ノ訓示ヲ傳達セラル、

#### 訓示

過般滿州軍總司令官ヨリ、彈藥節約、疾病予防ニ関シ、左ノ二訓示アリ、各部団隊長ハ、宜シク其ノ趣旨ヲ体シ、部下ヲ戒飾シテ、欠漏遺洩ナキヲ期スベシ、

一、速射銃砲發明アリテヨリ、射撃ノ速度著シク増大シ、之ヲ既往ノ戦役徵スルニ、乱射ノ弊ニ陥リ易キ傾キアリ、限リアル製造力ト運搬力トヲ以テ、無限ノ需要ニ応セシムル事ハ、殆ド不可能ノ事ニ属ス、今後ノ会戦ニ於テ、

万一決戦射撃ノ時機ニ応シ、供給ノ続カサルガ如キ事アラバ、実ニ由々シキ大事ニシテ、寒心ニ堪ヘサルモノアリ、宜シク各級指揮官ヲシテ、茲ニ

留意シ、確于タル効力ヲ認ムル事ナク乱射ニ陥ル如キハ、敵ニ戒飾シテ、彈藥ノ節約ヲ全フシ、以テ決勝ノ需要ニ応ゼシメラレン事ヲ要ス、

二、内外古今ノ戦史ニ徴スルニ、疾病、殊ニ伝染病ニヨル惨害ハ、却テ戦闘場裡ノ損害ヨリ甚タシキヲ見ル、大ニ戒慎スベキコトトス、今ヤ兩期正ニ過キントス、滿州ノ野常ニ兩期後ニ於テ悪疫ノ發生スル事多キハ、曩ニ經驗スル如ナリ、各軍ニ於テ其ノ衛生機関ヲ督勵シ、之等ノ予防ニ違算ナカルベキハ嚴ニ信スル所ナルモ、我作戦ノ前途尚遠ナルヲ思ヘハ、転々焦慮ニ堪ヘサルモノアリ、茲ニ聊カ所感ヲ陳ジ、各官ノ注意ヲ促サントス、各

官宜シク其部下各機関ヲ督シ、衛生上毫毛遺憾ナキヲ期セヨ、

八月三十日、第三中隊ハ、各小隊ヲ旧陣地タル小孤山ニ留メ、主力ハ大孤山東南斜面ニ陣地ヲ交換セリ、此ノ日皇太子殿下ヨリ左ノ令旨ヲ賜ハル、

#### 令旨

連日連夜敵ノ堅壘ヲ攻撃シ、不屈不撓、遂ニ其ノ一部ヲ奪取シタル、第三軍將卒ノ極メテ勇敢ナル動作ヲ嘆賞ス、

當時脚氣流行シ、兵員ノ損耗大ナリシヲ以テ、大ニ麦飯ノ給養ヲ奨励シ、且ツ昼飯ニハ重焼麵麩ヲ用ヒシメタリ、

八月三十一日、左ノ訓示ニ接ス、(左ニ記スル所ハ、本訓令ノ一部ナリ)

#### 第三軍訓令 八月三十一日午前十時 於柳樹房

一、軍ハ、爾今正攻法ニヨリ、敵壘ノ奪取ヲ努メントス、然レドモ各級指揮官ハ、機ヲ得ル度ニ強襲法ヲ併用シ、且絶ヘズ有力ナル斥候又ハ偵察隊等ヲ以テ、敵ノ安居休息ヲ妨害シ、奔命ニ疲レシムルコトヲ計ルベシ、

二、野戦及攻城砲兵ハ、各射撃シ得ル地区内ニ於テ、自己ノ判断ニ依リ、又ハ各師団長等ノ要求ニ応シ、適切ナル時機ニ於テ、最モ効力アル射撃ヲナスベシ、何レノ場合ニ於テモ、彈藥ノ節約ヲ計ル事勿論ナルモ、我歩兵將ニ敵壘ニ突入セントスルノ瞬間ニアリテハ、全力ヲ尽シテ之ヲ援助シベシ、而シテ一度其ノ目的ヲ達セハ中止シ、爾後ノ要求ニ応スル如ク準備シアルヲ要ス、

三、対壕作業中ハ、各部隊ハ、勉メテ独力ヲ以テ、敵ノ諸企圖ヲ防止シ、萬止ムヲ得サルニ場合ニアレハ、他ノ援助、殊ニ重砲兵ノ協力を乞フベカラズ、是レ砲彈ノ節約ト最モ必要ナル時機ニ於テ最モ猛烈ニ射撃セシメントスル目的ニ外ナラザレバナリ、

四、突撃前ニ於テハ勿論、対壕作業中ニ於テモ、各梯隊並ニ比隣部隊ハ、確實ニ連絡ヲ保持シ、相協力シテ敵ノ企圖ヲ阻碍スベク準備シアルヲ要ス、

五、從來我損害ノ多キハ、一ハ各部隊ノ攻撃前進中、密集ニ過クルノ弊アリシニ依ル、故ニ爾後ハ、連繫ヲ失ハサルヲ度トシテ、疎散ノ隊形ヲ取り、殊ニ一堡壘ヲ奪取シタル場合ニ於テハ、直ニ左右ニ延伸シテ、一方ニハ射撃

ヲ準備シ、他方ニハ各自工事ニ着手スルヲ要ス、

六、突撃ノ場合ニ於テ、將校ノ死傷多キハ、我軍ノ美德トスル所ナルモ、一方ニハ之ガタメ大ニ爾後ノ戦闘力ヲ滅殺ス、故ニ自今一堡壘ニ突入スル場合ニ於テハ、必要ノ將校ノミ部隊ノ先頭ニアリテ誘導シ、他ハ背後ヨリ之ヲ推進シ、先導者倒レハ之ニ代ルカ如クスルヲ要ス、

七、各師団及各部隊間ノ連繫、殊ニ突撃歩兵ト援助砲兵トノ協同動作ヲ確實適切ナラシムルタメ、左ノ記号ヲ用フ、

昼間ニハ火箭又ハ旗 夜間ハ火箭

八、野戦砲兵、殊ニ山砲兵ノ一部ハ、突撃歩兵ニ随伴シテ自己ノ危険ヲ顧ミス猛火ヲ加ヘ、ナルベク敏活ニ堡壘内ニ進入シ、奪取シタル堡壘ノ占領ヲ確實ニスルコト緊要ナリ、

九月一日、師団長ノ訓示ニ接ス、其ノ全文左ノ如シ、

我師団、出征以來茲ニ数月、此ノ間劍山、老坐、大白山ニ、大小弧山ニ命令ノ下ル処、任務ノ課セラルル処、未タ嘗テ遂行セサルコトナシ、之ガタメ軍ノ予定行動ヲ進捗セシメ、併テ敵ヲシテ肝胆ヲ寒カラシメタリ、茲ニ於テカ我第十一師団ノ名声ハ、軍中ニ喧伝セラル、ニ至ル、予各官ト共ニ内ニ歎ビ、外ニ誇ル所ナリトス、如此我師団ヲシテ此名声ヲ博セシメタルモノハ、將校以下ノ國家ニ対スル忠愛ノ精神ト、勇敢ナル動作ト、一心同体事ニ当ルノ共同力トニ外ナラザルナリ、光春之ヲ当師団長ニ奉シ、各官ト共ニ此ノ光榮ヲ荷フ、感極テ涙下ルモノ數回ナリキ、依テ今後益々奮勵努力シ、各官ト共ニ誓テ國家交戦ノ目的ヲ達セントセシニ、偶々不幸ノ病ニ罹リ、当分此ノ志ヲ果ス能ハサルハ、畢生ノ遺憾ナリトス、然レトモ幸ニ山中少將以下各官ノ在ルアリ、予ハ安シテ師団ノ指揮ヲ全少將ニ委シ、一意専心之ヲ治癒ニ全力ヲ注ギ、速ニ快復ヲ謀リ、再ヒ各官ノ先頭ニ立タン事ヲ期セリ、各官ハ、宜シク全少將ヲ助クルニ予ヲ助クルガ如ク、益々忠愛ノ精神ヲ鼓舞シ、勇敢動作ヲ躬行シ、一心同体事ニ當リ、以テ所望ノ成績ヲ軍中ニ冠絶セシコトヲ望ム、

右ノ希望ヲ述フルノ終ニ監ミ、一ノ注意ヲ促サントス、他ニ非ス、去ル二十一日來、我師団ノ任務タル鷄冠山北砲台及望台ノ攻略共ニ目的ヲ達セサルノミナ

ラズ、各官ガ多年ノ心ヲ籠メ、力ヲ尽シテ教育指導セシ最愛ナル部下約四千人ノ多キハ、空シク敵ノ堡壘下ニ斃レテ、而モ其屍モ我手ニ收容シ得サルモノ多キハ、實ニ悲惨中ノ悲惨ナリト云フベシ、之ガタメ今日我將校以下集リ語レバ必ズ云フ、此ノ如キ悲惨ハ、古來戦史ニ見サル所ナリ、甚ダシキニ至リテハ、此四千ノ部下ハ、殆ト徒死ナリト、甲伝ヘ乙和シテ平卒ノ面前ヲモ憚ラサルモノ、如シト、實ニ慨嘆ニ堪ヘサルナリ、何トナレハ、國家ノ目的ハ、今日尚依然トシテ攻勢ノナリ、然ルニ萎花流水ノ如ク一度去リテ挽回シ得ラレサル過去ノ事ヲ追回シ、士氣ヲ挫折セシムルカ如キハ、真ニ國家ノ目的ニ反戾スルノ甚タシキモノト云ハサルヲ得ス、況ンヤ此挽回シ得サル四千人ノ死ハ、敵ノ金城鉄壁ト頼ム旅順ノ一角ヲシテ、我友軍タル第九師団ノタメニ占領ノ地歩ヲ与ヘタルハ、少シク道理ヲ解スルモノ、知ル所ニシテ、而モ我軍力優握ナル勅語ヲ拜受スルノ素地ヲ為セシヤモ知ルヘカラサルナリ、果シテ然ランニハ、死シテ余榮アリト謂ハサルヲ得ス、何ノ歎ニ足ラン、何ノ憂フルヲ要セン、須ク此死ヲ賞揚シ、其ノ効ヲ頌讚シ、此ノ國家ニ功榮多キ死者ノタメニ、彼ノ頑迷ナル露軍ヲ全滅シテ、以テ國家ノ目的ヲ達シ、亡友ノ靈魂ヲ弔スルハ、我生存者ノ一大義務ナリト鼓舞シ、奮勵セシムルコトハ、幹部タル將校ノ本分ナリ、予嘗テ征途ニ上ル前、各官ニ注意セシコトアリ、即露人ハ頑強ナリ、各人毎ニ二人ヲ殺戮スルニ非サレバ、國家ノ目的ヲ達スル能ハサルナリト、故ニ我々ノ決心覚悟ハ、楠木公ノ七度人間ニ生レ此ノ賊ヲ滅ス云々ノ語ヲ以テ、決心トスルヲ要ス、果シテ然ランニハ、四千人何カアラン、全滅ニ全滅ヲ重ネ、補充ニ補充ヲ以テシ、而シテ初テ國家最終ノ戦捷ヲ期スベキナリ、彼ノ萎花流水ト一般挽回シ得ベカラサル繰言ヲナシ、徒ニ士氣ヲ挫折スルガ如キハ、爾今注意アランコトヲ望ム、

更ニ一言ス、要塞ナルモノハ、天險ニ加フル二人為的障礙ヲ以テシ、完全無欠ノ防御陣地ヲ形成スルモノナルガ故ニ、之ガ攻撃法又普通ノ野戦ト大ニ異ル所ナカルベカラズ、所謂要塞戦即チ之ナリ、而テ該戦術中諸種ノ方法アレドモ、短時日間ニ之ヲ攻略センニハ、強襲ヲ以テスルノ外法ナシ、過般來我第三軍ノ実行セシモノ即チ之ナリ、古來戦史ニ徴スルニ、強襲ニ於テハ、通常莫大ノ犠

牲ヲ供シ、而テ其奏効如何ハ、全ク攻者士氣ノ盛衰不屈不撓ノ攻撃動作ノ数回繰返シ得ルト否ト二関スルモノナリ、「ブレブナ」ノ如キ十数回ノ突撃ヲ繰返シ、而テ後初テ之ヲ陥落シ得タルニ非スヤ、今ヤ我国家ハ、吾人ニ此ノ強襲ヲナスノ外、他ノ方法ヲ許ササルナク、吾人ハ国家ノタメニ全力ヲ挙ケテ、之カ犠牲タラスンハアルヘカラス、然ニ我攻撃僅ニ二三回ニシテ、已ニ能ク二個ノ堡塁ヲ奪集セリ、此ノ勢ヲ以テ更ニ数回ヲ重ヌレハ、遂ニ能ク其全部ヲ陥落シ得ルヤ必セリ、況ンヤ彼ハ孤城落日日々其戦闘員ヲ減耗シアルニ拘ラス、我ハ続々新鋭ノ補充員ヲ得テ、士氣益々旺盛ナルニ於テオヤ、各官其レ此ノ意ヲ体シ、飽迄攻撃的精神ヲ喚奮シ、攻撃命令ノ下ルヲ待ツコト、渴者ノ水ヲ待ツカ如クナラサルヘカラス、

第十一師団長 土屋 光春

九月二日攻囲戦ヲ進ムルタメ、左ノ師団命令ヲ受ク、

第十一師団命令

軍隊区分  
一、師団ハ今夜、五家房ヨリ小孤山西南端亘リ攻囲

右翼地区隊  
線ヲ進メントス、

長 山中少将  
第九師団第一線ノ位置旧ノ如シ、

歩兵第二十二連隊本部及  
第一大隊（一中隊欠）歩  
兵第四十四連隊本部及二  
中隊  
且ツ堅固ニ工事ヲ施スベシ、

歩兵第十二連隊（二中隊  
欠）

右翼地区隊

五家房附近ニ於テ、第九師団ト連絡シ、南部王  
家屯南方ノ高地ヲ経テ、大孤山前亘上前ノ字ノ  
西方約四百米突ノ稜線ヲ含ム線、

騎兵小隊長ノ指揮スル半  
小隊

機関砲第六、第八小隊工  
兵第一、第二中隊（一小  
隊欠）  
左翼地区隊  
右翼地区隊ニ連絡シ、小孤山西南端附近ニ亘ル  
線迄、

左翼地区隊  
長 神尾少将

歩兵第四十三連隊

騎兵小隊長ノ指揮スル半  
小隊

砲兵第三中隊

機関砲第五小隊（二分隊  
欠）

工兵第二中隊ノ一小隊

砲兵隊

予備隊

歩兵第十二連隊ノ二中隊

騎兵第二中隊（二半小隊  
欠）

工兵大隊本部及第三中隊  
ノ一小隊

師団長 土屋光春

此ノ軍隊区分ニ於テ、兵力ノ不足セルハ、残存セル将卒ヲ以テ、臨時編成セル結果ニシテ、師団ノ実力ヲ示スモノトス、又騎兵欠ケタルハ、先ニ北方ニ転進セシニ由ル、

九月二日、予備砲兵少尉齊藤弥三郎（中尉ニ進ミ撫順ニ戦死）以下下士卒七十五名、馬五十六頭、補充トシテ着隊ス、依テ之ヲ各中隊及連隊段列ニ配当ス、而テ齊藤少尉ハ、第二中隊小隊長タリ、

第一、第二、第四軍ハ、八月二十九日以来、遼陽附近ノ敵ニ対シ、攻撃運動ヲ起シ、爾來連続苦戦ノ後、九月一日ヲ以テ、敵ヲ北方ニ撃退シタル通報ニ接ス、九月三日、露帝ハ、旅順守備軍ノ勇敢ヲ嘉ミシ、旅順防御ニ従事スル陸海軍人ノ勤務ハ、五月十四日ヨリ終結ニ至ル迄一ヶ月ヲ一ヶ月ニ計算スベキ旨ノ勅令ヲ下セリ、

九月三日、補充大隊中隊長タリシ大尉栗並道次郎、補充トシテ到着ニ付キ、第

特ニ海岸ヲ警戒スヘシ、

三、右翼地区隊ハ、指令ノ陣地ヲ占領後、東鷄冠山北砲台及東鷄冠山砲台ニ向ヒ、対壕作業ヲ実施スベシ、之ニ関スル詳細ノ計画ハ、工兵大隊長ヲシテ指示セシム、

四、予備隊及衛生隊ハ、午後九時迄ニ大孤山西北附近ニ位置スベシ、

五、師団爾余部隊ノ位置任務ハ、旧ノ如シ、

六、予ハ、明日大孤山西北麓ニ位置ス、

一中隊長ヲ命ズ、

九月七日、敵狀監視中ナリシ小川中尉及上等兵一名、敵砲彈ノタメニ傷痍ヲ受ケ、

九月九日、連隊長足立大佐第九師団參謀長トシテ転出シ、岡島中尉ハ第二大隊副官、秦少尉ハ連隊附仰付ラル、

本日、大元帥陛下ヨリ、侍從武官、皇后陛下ヨリ侍医、皇太子殿下ヨリ東宮武官ヲ當軍ニ差遣セラレ、優僱ナル御沙汰ヲ伝ヘサセラレ、且ツ第三軍ノ將士ニ對シ、清酒五百樽、海苔二万帖ヲ下賜セラレタリ、

九月十日、敵ノ機関砲破壊ノ目的ヲ以テ、四十七密海軍砲二門ヲ當隊ノ人員ヲ以テ編成スルコトナリ、大材少尉指揮ノ下ニ下士卒十四名ヲ分遣ス、

九月十日、大孤山展望哨トシテ、一週間毎ニ中少尉以下三名ヲ派遣スルコトトナレリ、

九月十一日、足立大佐ノ後任トシテ、中佐深堀猪之助着隊セラル(大佐ニ進ミ予備役)、

九月十一日、左ノ訓示ヲ受ケ、

#### 訓示

茲ニ我軍ノ將卒ニ告ケ、

夫レ旅順ノ要塞ハ、敵軍難攻不落トスル所、而モ諸子ノ勇武ナル連日連夜攻撃ヲ以テ、業ニ已ニ其ノ第一、第二防禦線ヲ略取シ、進ンテ其ノ本廓ニ肉迫セリ、茲ニ於テ我大元帥陛下、皇后陛下、皇太子殿下深ク諸子ノ忠誠ヲ嘉シ、曩ニハ優僱ナル勅語及令旨ヲ賜ヒ、今又侍從武官、待医及東宮武官ヲ派シテ、諸子ノ勞ヲ稿ハシメラル、我軍ノ光榮亦余アリト云フベシ、

独リ憾ム、諸子ノ戦友ニシテ、敵彈ニ斃シ、此ノ天恩ヲ拝スル能ハサルモノ鮮トセサルヲ、諸子夫レ更ニ感奮興起セスシテ可ナランヤ、希曲素ヨリ信ズ、諸子ノ堅忍不拔ナル一難ヲ経ル毎ニ猛氣百倍シ、遂ニ九仞ノ功ヲ一簣ニ全フセンコトヲ、

日者諸子ノ新戦友陸續來着シ、攻城材料又漸ヲ以テ多キ加ヘツツアリ、而テ對壕作業ハ、刻々其ノ歩ヲ進メ、敵ハ窮鼠ノ頑ヲ以テ、残塁ヲ死守スルモ、已ニ

其困廓ノ二堡ヲ失ヒ、兵力ハ日々減衰シ、彈藥ハ尽クルニ垂ントス、諸子ニシテ耐忍健闘シ、機ヲ見テ更ニ絶大ノ打撃ヲ加ヘンカ、其ノ運命ヤ知ルベキノミ、惟ニ旅順陥落ノ遅速ハ、全般ノ戦局ニ関スルコト重大ナリ、而テ北方ノ皇師ハ、既ニ敵ノ大軍ヲ療陽ニ撃破シ、宇内万邦ノ視線ニ此ノ旅順ニ集レリ、斯ノ時ニ當リ、我軍之方合圍ノ任ニ當ル、憫ニ軍人ノ素懷ニアラズヤ、希典望ムラクハ、諸子ト共ニ奮テ、我軍ノ威武ヲ発揚シ、速ニ拔群ノ功ヲ奏シ、以テ天恩ニ答ヘ奉ランコトヲ、

明治三十七年九月十一日

第三軍司令官男爵 乃木希典

八月十三日附、特務曹長豊島恕、砲兵少尉二任セラル、

補充隊長タリシ少佐酒寄由三郎、森本少佐ノ後任トシテ本日着隊、  
九月十七日、補充トシテ下士卒三十二名到着ス、

#### 第二節 九月十九、二十日、第一、第九師団ノ攻撃援助

八月十九日ヨリ全二十四日ニ亘ル強襲的攻撃ノ成果ハ、吾人ノ予想ニ反シ約一万五千ノ戦鬪員ト各種砲彈ノ大部ヲ消尽シテ、僅ニ盤龍山東西二砲台ヲ奪取シタルニ過ぎズ、是ニ於テカ比類ナキ勇氣モ、機械力ニ敵スル能ハサルヲ覺レリ、換言スレハ、死守ノ戍兵ヲ有スル要塞ニ對シテハ、正攻法ヲ用ヒ、逐次一地区、一堡壘ヲ奪取シ、以テ其命脈ヲ短縮スルヨリ外、他ニ良法ナキヲ察知セリ、之ヲ以テ、八月三十一日正攻法ノ施行ニ関スル軍訓令ヲ下シ、九月一日ヨリ第一師団ハ水師營南方堡壘ニ、第九師団ハ龍眼北方角面堡壘ニ、第十一師団ハ東鷄冠山砲台及同北砲台ニ向ヒ、對壕作業ヲ開始セリ、然ルニ九月十七、八日頃ニ至リテハ、龍眼北方角面堡壘及水師營南方堡壘ニ對スル對壕ハ、約五千米ノ距離ニ近迫シ、又追送砲彈並補充人員ノ大部モ到着シテ、再ビ一戦ヲ交ヘ得ヘキ狀況トナレリ、

203高地及海鼠山ノ奪取ヲ企図セシ所以ノモノハ、敵ヲ圧迫シテ其ノ占領地区ヲ減縮スル外、左ニ記スルガ如キ特別ノ理由アルニ由ル、既ニ述ブルガ如ク、軍ハ前回ノ戦鬪ニ於テ、旅順要塞ノ陥落ハ、短日月ヲ以テ期スベカラサルコトヲ察知セリ、是ニ於テカ、一方ニハ正攻法ヲ用ヒ、歩々ノ奪取ヲ勉ムベシト雖、

他方ニハ諸般ノ關係上、一日モ早ク敵ノ蟄伏艦隊ヲ処決スルノ必要アリ、之ガタメニ港内ノ展望ナルベク広濶ナル地区ヲ占領シ、以テ軍艦射撃ヲ施行セサルベカラス、而テ此要求ヲ充足シ得ヘキ地点ハ、203高地及海鼠山附近ト判断セラレタリ、

以上ノ關係ニヨリ、軍ハ、九月十九日ヲ以テ、龍眼北方角面堡、水師營南方堡、203高地及海鼠山附近ノ一帯ノ敵壘ヲ奪取スルニ決シタリ、

九月十八日午前十時三十分、師団命令ニ接ス、其ノ要旨左ノ如シ、

一、軍ハ、明日第一師団ヲ以テ、203高地及近水師營南方高地ヲ、第九師団ヲ以テ龍眼北方高地ノ敵壘ヲ攻撃ス、

二、師団ハ、前面ノ敵ヲ牽制シ、軍ノ攻撃ヲ容易ナラシメントス、

三、砲兵隊ハ、攻城砲兵隊ノ砲撃ヲ顧慮シ、主トシテ東鷄冠山砲台及北砲台ヲ射撃スベシ、但シ、一門三十発以内トス、

特ニ敵ノ砲種砲数ヲ偵察スベシ、

此ノ命令ニ基キ、連隊ハ、更ニ細部ノ命令ヲ下シ、尚彈藥節約ノタメ、射撃実施ノ方法、突撃部隊トノ連絡、敵状偵察ノ方法等ヲ詳細ニ亘リ訓示ス、

九月十九日、大孤山戦利野砲先ヅ射撃ヲ初ム、敵ハ、恰モ遺恨骨髓ニ徹シタルモノ、如ク、前面一帯ノ砲台一斉ニ立テ、直ニ之ヲ沈黙セシメ、其流弾ハ大孤山後方各地ニ落下シテ、我段列ニ多少ノ損害ヲ与ヘタリ、然モ爾後我山砲ノ射撃ニ対シテハ、恰モ知ラサル真似シテ、殆ド応射スルモノナシ、唯東鷄冠山東南砲台ヨリ多少ノ射弾ヲ送リタルモ、素ヨリ損害ナシ、然レドモ、午後六時ニ至リ、我歩兵逐次前進シテ射撃ヲ始ムルニ至ルヤ、敵ノ歩砲兵モ亦之ニ応戦シ、戦況漸ク活氣ヲ帯ヒテ、能ク牽制ノ目的ヲ達スルヲ得タリ、即知ル、単ニ砲撃ノミヲ以テ敵ヲ欺偏スルハ殆ト不可能ニシテ、歩砲連合真ニ攻撃ヲ受ケルガ如キ感想ヲ敵ニ抱カシムルニ非サレバ、決シテ牽制ノ目的ヲ達スルコト能ハサルモノナルコトヲ、

午後八時、師団命令ニ基キ、次ノ要旨ノ命令ヲ下セリ、

一、第九師団ハ、龍眼北方堡壘ニ突入セリ、第一師団ノ状況ハ、不明ナリ、師団ハ、現在ノ姿勢ニ在テ夜ヲ徹ス、

二、砲兵隊ハ、射撃準備ヲ整ヘ、夜ヲ徹セントス、

此ノ世要塞ノ前正面、殊ニ第九師団ノ方面ニ於テ、彼我ノ銃砲声盛ナリ、九月二十日午前六時二十分、師団命令ニ基キ、左記要旨ノ命令ヲ下ス、

一、昨夜來、第九師団ハ、龍眼北方ノ高地ヲ略々占領シタルモ、其ノ他ノ状況

ニ就テハ不明ナリ、

軍ハ、本日攻撃ヲ続行ス、

徒歩砲兵ハ、本日尚砲撃ヲナス筈、

師団ハ、昨日ノ如ク前面ノ敵ニ対シテ牽制動作ヲナス、

二、連隊ハ、本日砲撃ヲ続行セントス、射撃スベキ彈藥ハ、榴霰彈一門二十五發以内トス、

命令ニ基キ、各中隊ハ、午前七時頃ヨリ、当面ノ敵砲兵ニ戦鬪ヲ挑ミタルモ、敵ハ真面目ニ応戦スルコトナク、午前十一時頃ニ至リ、攻城砲兵亦射撃ヲ停止シタルヲ以テ、彈藥ノ節約ヲ謀リ、射撃ヲ停止セリ、

午後六時、左ノ通報ニ接ス、

第一師団ハ、午後一時、水師營南方堡壘全部ヲ占領シ、目下海鼠山及203高地ヲ攻撃中ナリ、

九月二十日夜半、第一師団ハ、一時203高地ヲ占領シタルモ、再ビ之ヲ失フタル通報ニ接ス、爾後我師団ハ、更ニ牽制動作開始前ノ姿勢ニ復シ、孜々トシテ対壕作業ヲ実施スルニ至レリ、

龍眼北方角面堡及水師營附近角面堡防禦ノタメ、露軍ハ、約二百名ノ死者数ヲ生ジタリ、

此ノ戦鬪ニ於テ、軍ハ、四個ノ攻撃目標中三個、即チ龍眼北方角面堡、水師營南方堡壘及海鼠山堡壘ヲ奪取シ得タルモ、最後ノ目標タル203高地ニ対シテハ、最モ多ノ力ヲ費シテ、遂ニ失敗ニ終リシハ、最モ遺憾トスル所ナリ、而テ我軍ノ死傷(第十一師団ヲ除ク)四千五百名、消費セル砲彈(全上)六千八百十四發ナリ、

第三節 九月二十一日ヨリ第二回総攻撃ニ至ル間ノ状況



九月二十二日ヨリ夏衣冬袴ヲ用フ、又夜間必要ヲ認ムレバ、冬衣ヲ用フルヲ得ル事トナレリ、此ノ時期ニ至レバ、所謂秋冷ヲ覚ヘ、日没ノ時刻モ漸次早マリテ、午後七時、既ニ薄暮トナルノ状況ニアリ、  
九月二十五日、左ノ通報アリ、

少将神尾光臣ハ、遼東守備軍參謀長ニ転シ、少将前田隆禮其後任ニ命課セララル、  
九月二十七日、左ノ通報アリ、

石田參謀長ハ、留守第十一師団指令部附ニ、其ノ後任ハ歩兵中佐齊藤力三郎(今少将)ニ命課セララル、

九月二十八日、師団長ノ訓令ニ基キ、次ノ訓令ヲ下ス、

#### 訓令ノ要旨

一、E及F堡壘ニ向テスル対壕作業ノ進捗ヲ妨害スル敵ノ砲兵機関砲並ニ隨時現出スル有利ナル活動目標ニ対シ、狙撃的射撃ヲ実施セントス、甲ノ場合ニ於ケル射撃ノ目的ハ、主トシテ敵ヲ威嚇シ、友軍ノ士氣ヲ援クルニアルヲ以テ、必ズシモ効ヲ望マズ、之ニ反シ乙ノ場合ニ於ケル射撃ハ、効力ヲ確實ニ予期シ得ベキ公算アル場合ニ非レバ、実施スベカラス、

二、此ノ狙撃的射撃ニ使用スル砲数ヲ左ノ如ク定ム、

第一大隊ヨリ、昼間ノタメ一門、夜間ノタメ一門

第二大隊ヨリ、夜間ノタメ二門

三、狙撃ニ任スル砲車ハ、成ルベク放列陣地ヨリ離隔シ、且ツ敵ノ集中砲火ニ由リテ生スル危害ヲ減少スルタメ、充分ナル顧慮ヲ要ス、

四、一日ノ消費彈藥ハ、夜間ノタメ各大隊榴霰彈十發以内トシ、其日射撃セサル理由ヲ以テ、他ノ日ニ於テ定数以上ノ発射ヲナスヲ得ズ、

十月一日ヨリ探照燈ニ対スル射撃ヲ始ム、此ノ射撃ハ少数ノ射撃ヲ以テシテハ、到底機械ヲ破壊スル能ハサルヲ以テ、曳火彈ヲ以テ之ガ使用ヲ妨害スルヲ上策トス、

十月一日ヨリ日本軍ハ、二十八砲ヲ以テ、主トシテ東北正面ノ諸堡壘ヲ砲撃シ、守兵ノ士氣ハ益々銷沈セリ、蓋シ「クロバトキン」大將ノ来援ハ、今ヤ容易ニ期待スベカラス、加フルニ日本軍巨砲ノ威力ハ、守兵ノ肝胆ヲ寒カラシメ

タルヲ以テナリ、

十月三日午前零時三十分、前方ノ状況俄然變化シ、敵ハ、銃砲ヲ連発シ、光燄ヲ発射シ、殆ド平常見ルヘカラサル光景ヲ呈シタルヲ以テ、直ニ各中隊ニ射撃準備ヲ命ジ、以テ第二大隊ヲシテ射撃ヲナサシム、然ルニ漸時ニシテ銃砲擊漸ク衰ヘタルヲ以テ、射撃ヲ中止シ、午前一時五分、全ク射撃ヲ停止セリ、之レ敵ガ我対壕作業ヲ妨害センガタメ、小出撃ヲナシタルニ基因シ、彼我共ニ敵襲ヲ受ケタルモノト誤解セシ結果ニシテ、要塞戦ノ状態常ニ如シト雖、平日ニ比シ、真ノ敵ノ逆襲ニ非スヤト懸念スルニ至リシハ、全ク偶然ノ結果ナリトス、

十月四日、冬營研究委員ヲ設ケ、廠舎厩舎ノ採暖法ニ就キ研究ス、

十月五日彈藥製造力ノ關係上、銃製榴霰彈ナルモノヲ創意シ、爾今鋼製榴霰彈0・6榴霰彈、銃製榴霰彈各五ノ比ヲ以テ、補充スル旨通報ニ接ス、此銃製榴霰彈ハ、其ノ効力極メテ微弱ニシテ、単ニ戰場ノ光景ヲ彩色スルニ過ギサリシモノナリ、加之此彈丸ハ、不発頗ル多ク、彈着ノ觀測ニ不便ヲ感シタルヲ以テ、種々研究ノ結果、其原因信管ノ構造ニアルヲ發見シ、之ニ加工シテ漸ク多少ノ効力ヲ収ムルヲ得タリ、

同日、左翼地区隊ハ、奇襲ヲ以テ前地ノ要点ヲ占領スルニ決シ、第三中隊ハ、之ニ参加シテ其目的ヲ達ス、

十月九日午後八時頃、戦線俄カニ活氣ヲ呈シ、銃砲彈ノ響キ、光彈探照燈ノ光ト相応シテ、其光景悽愴ヲ極ム、依テ各中隊共予メ標定セル方向ニ基キ射撃ヲ開始シ、以テ友軍ニ声援ヲ与ヘタリ、

當時、我対壕作業ハ、頗ル進捗シテ、既ニ敵壘ノ斜底脚ニ達シ、彼我甚シク接近セシヲ以テ、勇敢ナル敵ハ、屢々小出撃ヲ行ヒ、意外ノ騷擾ヲ惹起センコト尠カラスタメニ、毎日少クモ二、三十名ノ死傷者ヲ出シ、火葬場多忙ヲ極ム、此ノ世ノ出撃ハ、能ク機宜ニ合シ、大ニ友軍歩兵ノ動作ヲ容易ナラシメタルモノトシ、如ク、当面ノ指揮官タリシ志岐少佐(今大佐)ハ、我艦隊ニ感謝狀ヲ致シ、謝意ヲ表セラレタリ、

十月十六日、我第十一師団方面ノ野戦砲ノ威力稍微弱ナルヲ認メラレシニ由ルガ、野戦砲兵第十八連隊ノ一大隊(二中隊編成)ヲ我連隊長ノ指揮下ニ屬セシ

メラレタリ、此ノ大隊ハ、大孤山東麓ニシテ第一、第二大隊陣中ノ中央後ニ放列ヲ布置シ、低伸セル弾道ヲ以テ、屢々有効ナル砲撃ヲ実施セリ、此ノ日、兵卒百七十八名、駄馬四十四頭ノ補充ヲ受ケ、

十月十五日左ノ 勅語ヲ拝受ス、

開戦以降、朕方陸海軍ハ、克ク其忠勇ヲ致シ、官僚衆庶其ノ心ヲ一ニシ、以テ朕力命ヲ遵奉シ、著々其歩ヲ進メ今日ニ及ブ、然ドモ前途尚遠ナリ、堅忍持久益々奉公ノ誠ヲ竭シ、以テ終局ノ目的ヲ達スルコトヲ努メヨ、

十月二十一日、師団長訓示ニ基キ、次ノ注意ヲ与フ、

一、部下ノ功績ヲ怠リナク筆記シ置クコト、

各幹部ハ、常ニ部下ノ功績ヲ手帖等ニ筆記シ置キ、一朝戦死等ヲナスモ、後任者ヲシテ、其ノ功績ヲ知得シ易カラシムルヲ要ス、若シ其精細ヲ筆記シ置ク能ハサルトキト雖、感情、殊勲、勲功、勲勞、功勞等ノ種別ハ、之ヲ部下ノ名簿ニ記載シ置クヲ可トス、

二、戦用器具、材料ハ、時状況ニ従ヒ多少要不要ヲ来シ、野戦ニ緊要欠クベカラサルモ、攻城戦ニアリテハ、大ナル必要ヲ見ス、或ハ全ク之ニ反スルモノモアルベシ、而テ目前必要アルモノノミヲ重ンスルハ、人情ノ常ニシテ、殊ニ兵卒ノ如キハ、免レ難キ所ナルベシ、然ニ今後旅順陥落ノ後ハ、野戦ニ従事セサルベカラス、此ノ時ニ至リ目下無用視セラレタルモノ、非常ノ必要ヲ感スルニ至ルベシ、又現時ノ姿勢ニアリテ、極メテ必要ナルモノモ、尚其手入及保存ノ粗略ナルヲ見ルコトアリ、故ニ戦用器具、材料ハ、一般ニ一層ノ注意アラシムコトヲ望ム、殊ニ二度内地ノ補充力ヲ顧ミル時ハ、此ノ注意ノ益々必要ナルヲ感スルナリ、

三、馬匹ハ、日々適當ニ之ヲ使用セサレバ、却テ体力ヲ減損シ、一旦勞働ヲ要スルトキニ會セハ、忽チ使用ニ堪ヘサルニ至ルハ言フ俟タス、今日迄ニ各軍ニ於テ此轍ヲ踏ミタルモノ堪ラスト云ヘリ、殊ニ当隊ノ如キハ、他日野戦ニ転ズルノ際、俄ニ駄馬ノ運搬力ヲ要求セサルベカラス、故ニ今日ヨリ之ニ慣熟セシムルヲ要ス、

十月二十二日、第二中隊長代理タリシ平原中尉ハ、第一歩兵彈藥縦列長ニ転シ、

其ノ後任トシテ師団副官中尉原田千丸（大尉ニ進ミ旅順ニ於テ戦死）命課セラリ、又第一歩兵彈藥縦列長タリシ阿部中尉ハ、第二中隊小隊長ニ、第二中隊小隊長タリシ齊藤少尉ハ、第六中隊小隊長ニ命課セラリ、

十月二十三日、旅順要塞陥落後ニ於テ、憲兵ノ業務ヲ補助セシムルタメ、師団ニ属スル憲兵ヲシテ、予メ憲兵業務ノ教習ヲナサシムルコトトナリ、当隊ヨリ下士以下六名ヲ派遣セリ、

十月二十六日、軍隊区分改正ニ伴ヒ、第三中隊ハ、後備歩兵第四旅団長武内少将ノ指揮下ニ入ル、

十月二十七日、士下六十名ノ補充員到着ス、

十月二十九日、皇后陛下御調製ノ卷軸繙帯ヲ當軍ニ下賜セラレタル通報ニ接ス、此日、原田中尉ハ大尉ニ、向井、景浦ノ両少尉ハ中尉ニ昇進シタル通報ニ接ス、

#### 第四章 旅順要塞第二回総攻撃

##### 第一節 攻撃準備

第二回攻撃実施前、歩砲兵ノ連撃ニ関シ、師団長ヨリ左ノ要旨ノ訓示ヲ伝達セラル、

抑モ陣地ニ抛レル敵ヲ攻撃センニハ、先ツ砲兵ヲ以テ彼ノ構築物ノ大部ヲ破壊シ、所々ニ破牆孔ヲ穿チ、然ル後歩兵突撃ヲ行ヒ、以テ占領ヲ確實ニスベキハ、一般ノ原則ナリ、然レドモ諸君ノ既ニ熟知セラル、如ク、敵ノ構築物ハ、頗ル堅固ニシテ、其塹壕ノ如キハ、殆ド総テ頑強ナル掩体ヲ有シ、最モ頑固ニ死守スルガ故ニ、我砲撃猛烈ナル間ハ、彼ハ其掩蓋下ニ蟄伏シアルモ、一旦我砲撃ニシテ、其火力ヲ減衰セシメンカ、彼ハ直ニ半ハ崩壊セラレタル構築物ニ抛リ、依然射撃ヲ以テ我ヲ妨害スルコト常ナリ、故ニ砲火已ミテハ到底彼ヲ其陣地ヨリ驅逐スルコト能ハサルナリ、此ニ於テカ砲火ノ成果ヲ待テ突撃ヲ実施スベキ歩兵ニ於テハ、其突撃時機ヲ決定スルコト頗ル肝要ナリ、何トナレバ、砲兵ノ射撃ハ、其限界ヲ越フルコト能ハザルガ故ニ、一旦其時機ヲ失ハシテ、早再再ビ突撃ニ転移スベキ時機ナカルベシ、此ノ時ニ於ケル我射撃ノ景況ハ、最モ猛烈ヲ極メ、其爆煙ハ、殆ト全ク敵陣地ヲ蓋ヒ、為ニ頑強ナル敵ト雖、其銃眼ニ

サへ頭部ヲ出シ能ハサルベシ、此ノ時機コソ、我歩兵ノ突撃ヲ実施スベキ唯一ノ機会ナリ、

十月三十日、第二回総攻撃ニ関シ、連隊長ノ訓示左ノ如シ、

今回ノ総攻撃ニ就テハ、我野戦砲兵ハ、現在所有弾数ノ外、他ニ補給ヲ受クルノ途ナシ、故ニ射撃ハ、最モ之ヲ節約シ、最後ノ時機ニ至ルモ、尚少クモ一門平均約三十発ヲ残留シアルヲ要ス、

之ガタメ山野砲ハ、総攻撃間、有利ノ目標現出スル毎ニ、狙撃的射撃ヲ実施シ、歩兵突撃ノ時機ニ至リ、始テ全部ノ射撃ヲ実施スベシ、

当日、砲火ハ、午前九時ヨリ開始シ、最モ緩除ナル精密照準ヲ以テシ、主トシテ破壊射撃(榴弾)ヲ行ヒ、突撃ノ時機稍々前ニ至レバ、榴霰弾射撃ヲナシ、以テ敵ノ頭ヲ出シ得サラシメ、我歩兵ノ前進スルヲ見ルヤ、一層其速度ヲ大ナラシメ、以テ我歩兵ノ前進路ヲ掃射シツツ、漸次射程ヲ延伸セシムベシ、此際ニ於テハ、無論全砲兵ハ、直接照準ヲナシ、以テ友軍ニ危害ヲ及ホササル如クスルヲ要ス、

我突撃歩兵ニ向ヒ縦射斜射ヲナスベキ敵ヲ制圧スベキ任務ヲ有スル砲兵ハ、前項ニ準ジ、我突撃部隊ヲ援助スベシ、

我突撃部隊旧囲壁ノ線ヲ占領セハ、山砲一ケ中隊ハ、対壕ヲ経テ東鶏冠山北砲台西方旧囲壁附近ニ陣地ヲ占領セシメントス、其ノ際、当該中隊ハ、陣地変換ノ当時、一門平均約六十発以上ノ弾薬ヲ有スルヲ要シ、又之ガタメ予メ前進ニ要スル諸準備ヲ為シアルベシ、

第二回総攻撃ニ於ケル我歩兵戦闘員左ノ如シ、

部隊号	将校	下士兵卒
第一師団	一三八	六八六九
第九師団	一五三	七二七七
第十一師団	一八五	六九四〇
後備歩兵第一旅団	五〇	三六三六
同第四旅団(一連隊欠)	七〇	三三三八
合計	五九六	二八〇九〇

即定員ニ不足スネコト一万二千三百四十三名ニシテ、其実力定員ノ約三分ノ二ニ相当ス、

又其ノ砲数左ノ如シ、

野砲 十八中隊 百二十八門  
山砲 十二中隊 七十二門  
重砲 二百十三門

(内二十八珊榴弾砲十八門、十五珊及至九珊ノ曲射砲  
百二十八門、平射砲六十七門)

四十七密海軍砲 十四門  
計 四百二十七門

### 第二節 攻撃実施

十月二十六日午前八時半ヨリ、重砲兵就中二十八珊榴弾砲ハ、敵ノ本防線上ニアル堡壘砲台ヲ砲撃セリ、連隊ハ、天明ト同時ニ射撃準備ヲ整へ、先第一大隊ノ一部砲車ヲ以テ、大孤山上ノ展望哨ト連絡シ、時々狙撃的射撃ヲ為サシメタリ、此ノ如キ景況ニ於テ、三日ヲ経過シ、越ヘテ十月二十九日ニ至リ、師団命令ニ基キ次ノ命令ヲ下セリ、

#### 連隊命令

一、軍ハ、明三十日ヲ以テ、総攻撃ヲ実施ス、

師団ハ、明三十日ヲ以テ、東鶏冠山北砲台ヨリ東鶏冠山砲台ニ亘ル間ノ諸砲台ヲ占領セントス、之ガタメ、午後一時ヲ以テ、各歩兵隊ハ、突撃前進ニ移ル筈、第一、第九師団ハ、松樹山、二龍山及P砲台ニ向ヒ各攻撃ヲ実施スル筈、

二、連隊ハ、明三十日、現在ノ陣地ニ在テ師団ノ攻撃ヲ援助セントス、各大隊(野砲大隊ヲ含ム)ハ、師団第二回要塞攻撃計画書ニ基キ、午前九時ヨリ射撃ヲ実施スベシ、

#### 注意

一、連隊及野砲大隊ハ、常ニ其ノ一部ヲ以テ、突撃歩兵ニ向ヒ縦射斜射ヲナス

ベキ敵ニ、対シ得ル如ク準備シアルヲ要ス、

二、野砲大隊ハ、右ノ外望台東南ノ敵ノ後方交通路及北砲台咽喉部ニ対シ、射撃シ得ル準備ニアルヲ要ス、

十月三十日、朝来我重砲ハ、敵ノ砲台ニ向ヒ砲撃ヲ加へ、全ク敵ノ諸砲台ヲ沈黙セシム、

午前九時ヨリ、連隊ハ、敵ノ第一線堡壘及塹壕ニ向ヒ、榴弾ヲ以テ破壊射撃ヲ行ハシム、

午前十時二十分、師団ヨリ左ノ通報ニ接ス、

P堡壘南方斜面上ノ散兵壕及東鷄冠山山腹散兵壕横牆附近ニ在ル敵ノ機関砲ニ向ヒ、榴弾ヲ以テ破壊射撃ヲ施行セラレンコトヲ望ム、

依テ両大隊ニ命ジ、其ノ一部ヲ以テ之ニ向ヒ、榴弾ヲ以テ破壊射撃ヲナサシム、午前十一時三十分ヨリ両大隊ニ命ジ、其ノ一部ヲ以テ望台下ヨリ東鷄冠山ニ亘ル門ノ支那旧口圍壁ニ向ヒ、榴霰弾ノ威嚇射撃ヲナサシム、

午前零時五十分ヨリ、友軍歩兵ノ突撃ヲ準備スルタメ、榴霰弾ノ迅速射ヲ行ハシム、

午後一時、我歩兵ノ突撃前進ニ移ルヤ、益々射撃速度ヲ増加シ、歩兵ノ敵壘ニ達セントスルニ從ヒ、漸次射程ヲ延伸ス、

午後一時三十分頃、我突撃隊ノ東鷄冠山絶頂ニ達スルヤ、連隊ハ、全力ヲ尽シテ其ノ占領ヲ援助シ、殊ニ之ニ対シ縦射斜射ヲ加フル敵砲兵ヲ征圧ス、第三中隊又此砲撃ニ参与シテ、偉功ヲ奏シタリ、此時機ニ至リ、敵ノ砲兵モ亦全力ヲ以テ我陣地ヲ砲撃シ、為ニ多少ノ損害ヲ生シタリ、

午後二時五十分、東鷄冠山砲台ヲ占領セシ友軍歩兵、腹背ニ敵ヲ受ケテ支持困難ナリ、遂ニ退却スルニ至ルヤ、敵ノ歩兵ハ之ヲ追躡シ、且Q砲台ニ対スル友軍歩兵ニ向ヒ斜射ヲ加ヘントスル状況アルヲ見テ、極力射撃速度ヲ増大シ、遂ニ其行動ヲ制肘スルヲ得タリ、爾後我連隊ハ、専心嶺山砲台及東鷄冠山中腹散兵壕ヲ占領シアル友軍歩兵ヲ支援スル目的ヲ以テ、絶ヘズ敵ノ歩砲兵ヲ制圧スルヲ努メタリ、

十月三十一日、東鷄冠山北砲台ヲ爆破シテ、更ニ攻撃ヲ復行シタルモ、爆破ノ

威力薄弱ニシテ、遂ニ其目的ヲ達スルニ至ラザリキ、

今回ノ攻撃ハ、我砲火ノ威力強大ニシテ、敵ノ主要ナル術工物ヲ破壊シ、且ツ對壕作業モ既ニ敵ノ射堤附近ニ達シアリシヲ以テ、突撃ノ実施容易ナリシト雖、敵ノ勇敢ナル逆襲ニ依リ、一時占領シタル東鷄冠山砲台及其中腹散兵壕モ、遂ニ放棄スルノ已ムヲ得サルニ至リ、僅ニ微々タル嶺山ヲ占領シ得タルニ止マリシハ、実ニ千秋ノ恨事ナリト云フベシ、然レドモ、此ノ蕞爾タル嶺山モ爾後ノ攻囲作業ニ尠カラザル便宜ヲ与へ、依テ以テ旅順陥落ノ械運ヲ促進セシムルニ与テ力アリシハ、争フベカラサル所ナリトス、

十月廿六日ヨリ開始セシ日本軍ノ攻撃ハ、十月二日ニ至リテ頓挫セリ、而テ露軍ハ、第二号側防堡（P堡壘後二一ノ戸堡壘ト呼ビシモノ）ヲ失ヒタル外、要塞砲十門、野戦砲及機関砲各四門ヲ失ヒタルニ過キズ、

此戦闘ニ於テ我師団ノ損傷死者百六十五、傷者八百三十三、行衛不明四百五十、計千四百四十八、我連隊ノ消費弾藥ハ、榴弾四百十六、榴霰弾千六百七、計二千二十三発ナリ、

此ノ回ノ戦闘ハ、第九、第十一師団方面ヲ主トシ、第一師団ハ其ノ一部ヲ以テ

松樹山砲台ヲ攻撃シタルニ止マリシヲ以テ、全軍ノ損害三千ヲ越ヘズ、之ヲ第一回総攻撃ニ比スレバ、僅ニ五分ノ一ニ過ギズ、從ツテ得ル所モ又尠カリシト雖、主攻撃目標ノ外、壕内ニ侵入シ得タルハ、又此攻撃ノ賜ナリト云ハサルベカラス、殊ニ此戦闘ニ於テ全軍ノ砲兵ハ、実ニ二万三千三百四十三発ノ多数射弾ヲ発射シテ、最モ有力ナル援助ヲ突撃部隊ニ与ヘタルハ、全軍ノ損害ヲ減少スル上ニ於テ、甚大ノ効果アリタルモノトス、

第五章 第二回総攻撃結了ヨリ第三回総攻撃開始迄ノ状況

十月三十日、連隊副官溝口大尉ハ、第三軍司令部附ヲ命ゼラレ、岡島中尉副官代理、塩崎少尉第二大隊副官代理タリ、

十一月三日ハ、我天皇陛下ノ御誕辰日ニシテ、而モ露帝ノ即位日ニ相当ス、豈ニ又奇ナラズヤ、

十一月六日、師団命令ニ基キ、我作業隊ニ対シ、妨害ヲ加フル敵ヲ射撃スル目

的ヲ以テ、砲車一門ヲ東鷄冠山北砲台穹窿内ニ出ス、之ヲ指揮官ハ、予備砲兵少尉秦克己タリ、

予備三等獣医小松徳志、連隊段列附トシテ着隊ス、

従来防御ノ姿勢ニアリシ左翼地区隊、白銀山砲台ニ対シ、対壕作業ヲ開始セリ、

P 堡壘ハ、一戸少將之ヲ占領シタルヲ以テ、一戸堡壘ト命名セラル、

十一月八日、韓国ヨリ慰問大使トシテ樞重頭来軍シ、左ノ勅語ヲ伝フ、

勅語

朕惟ルニ、我国ト日本国トハ、其勢唇齒ノ關係ニ属シ、両国ノ厚誼兄弟モ嘗ナラズ、今回ノ義拳タルヤ、大日本皇帝陛下力、一ハ自国ノ武威ヲ輝カシ、一ハ支那ノ独立ヲ鞏固ニシテ、以テ東洋ノ大局ヲ維持シ、以テ信徳ヲ世界ニ示サル、嗚呼威ナル哉、且陸海軍將卒ハ、忠愛勇敢進ムアリテ退クアルナシ、朕甚ダ之ヲ嘉ニス、風雨煙霧ノ曝露スルノ艱難ハ、誠ニ念ハサルベカラス、朕茲ニ陸軍副署勲二等樞重頭ヲ慰問使トシテ、滿州軍總司令部及連合艦隊ニ至ラシメ、其ノ勲積ヲ慰メ、兼テ瘡痍疾病等ノ難苦ヲ慰問シ、併テ金貨若干ヲ持シ、聊力以テ稿勞ノ一助トナサシム、之朕力眷々ノ至意ノミ、即茲ニ宣示ス、

光武八年十月二十六日

十一月十九日、喜多島特務曹長士官勤務ヲ命セラレ、第三中隊小隊長タリ、其結果宇都宮少尉ヲ第五中隊ニ転入セシム、

十一月五日、一等計手田中四郎主計ニ任ズ、

本日ヨリ一般ニ防寒被服ヲ着用ス、

十一月十八日、師団命令ニ基キ、我歩兵ノ行動ヲ援助スルタメ、第五中隊ヨリ津曲中尉ノ指揮スル一砲車ヲ東鷄冠山北砲台ニ出シ、地下穹窿ニアリテ射撃ヲナサシム、此砲車ハ、十九日、外壕内ニ於ケル敵ノ交通壕ニ対シ、榴彈二十八發、榴霰彈二發ヲ発射シ、該坑道ノ全部ヲ破壊シ、正午頃陣地ニ帰還セリ、此動作ニ対シ、師団長ハ、該砲車ニ賞賜ヲ賦与セラル、

十一月二十日、北進行動ノ準備トシテ、日課ヲ定メ、砲手馭者ノ教育ヲ開始ス、十一月二十一日、彈藥大隊長鳥川大尉、少佐ニ昇進ノ上、他ニ転ジ、安樂城少佐(大佐ニ進ミ予備)其後任タリ、

十一月二十二日、師団命令ニ基キ、石垣中尉ノ指揮スル第六中隊ノ一小隊ヲ前田少將ノ守備スル一戸堡壘ニ、又安部中尉ノ指揮スル第二中隊ノ一小隊ヲ新山大佐ノ隷下ニ直屬セシメ、歩兵陣地ニ前進セシム、当日、松本中尉第一歩兵彈藥縦列長トシテ転出ス、

従来、第九師団ニテ守備セシ一戸堡壘ヲ、前田少將ノ指揮スル歩兵第四十三連隊(一大隊半欠)、工兵第八大隊ノ一小隊、山砲一中隊ヲ以テ、守備交代スルコトナリ、前項ノ如ク取り敢ヘス石垣小隊ヲ派遣セシナリ、

十一月二十三日、新山大佐ノ指揮スル一隊ハ、東鷄冠山中腹散兵壕ヲ攻撃シ、接戦格闘ノ後、一時之ヲ占領シタルモ、敵ノ側防砲火ト有力ナル敵ノ逆襲ニ依リ、遂ニ之ヲ放棄スルノ已ムヲ得サルニ至レリ、此戦闘ニ於テ露軍ノ損害約二百ナリシト云フ、

## 第六章 旅順要塞第三回総攻撃

### 第一節 攻撃開始前ノ状況

十月三十日、第二回総攻撃ノ失敗後、我第三軍ハ、最モ困難ナル状況ニ陥レリ、則チ一方ニハ十月十五日、敵ノ太平洋艦隊ハ、大規模ノ準備ヲ以テ、其本国「リボー」ヲ出帆シ、快速力ヲ以テ航走シツヽアリ、他方ニハ沙河ノ大会戦後、敵ハ続々補充兵及増援隊ヲ送り、其優勢ヲ期スルヲ待チ、攻勢ニ転セントス、然ニ我旅順口封鎖艦隊ハ、開戦後殆ト一ヶ年ニ垂ントスルモ、同口内ニ蟄伏シアル敵ノ第一太平洋艦隊ニ拮抗シテ、回航修復ノ余裕ナシ、故ニ若シ十一月下旬ニ至ルモ、尚陸正面ノ作戦著シク發展セサルニ於テハ、我艦隊ハ、新来ノ敵艦隊ニ対スル策動ヲ準備スルタメ、已ヲ得ヌ旅順口ノ封鎖ヲ解キ、以テ本国ニ回航セサルベカラス、然ル時ハ、半死ノ要塞及敵艦ハ、直ニ彈藥糧食等ノ補給ヲ得テ、再ヒ活氣ヲ呈スルニ至ルベク、果シテ然ラハ、我滿州軍ト本国トノ交通ハ、忽チ不安トナリ、敵ノ第二太平洋艦隊ハ、行程ヲ倍速シテ絶東海面ニ現出スルナルベク、勢茲ニ至レバ、戦機一変ノ悲運ニ際会スルヤモ測ルルベカラサリシナリ、而テ此氣運ノ變動ヲ防止シ、且既往ノ戦勢ヲ益々有利ニ指導スヘキ大任ハ、實ニ我第三軍ノ双肩ニ在リ、是此次第三回ノ総攻撃ヲ企図シ、且不屈

不撓之ヲ実行セラレタル所以ナリ、  
第三回総攻撃ノ際ニ於ケル兵力ノ概数左ノ如シ、

第一、第九、第十一、第七師団（第一師団ノ外騎兵ノ大部欠）  
後備歩兵第六連隊

他師団ヨリ増援セル工兵六中隊

砲数ハ、第二回総攻撃ノ場合ニ、野戦砲兵第七連隊ヲ加ヘタル外、前回ニ全シ、  
其ノ他第八師団ノ歩兵一大隊増援ノタメ来着シタルモ、戦鬪ニ参加セス、  
十一月二十三日、左ノ勅語ヲ拝受ス、

勅語

旅順要塞ハ、敵ガ天険ニ加工シテ、金湯トナシタル所ナリ、其ノ攻略ノ容易ナ  
ラサル素ヨリ怪ムン足ラズ、

朕深ク汝等ノ労苦ヲ察シ、日夜軫念ニ堪ヘス、今ヤ陸海軍ノ情況ハ、旅順攻略  
ノ機ヲ緩フスルヲ得サルモノアリ、此ノ時ニ當リ、第三軍総攻撃ノ挙アルヲ聞  
キ、其ノ時機ヲ得タルヲ喜ヒ、成功ヲ望ム情甚タ切ナリ、汝等將卒夫レ自愛努  
力セヨ、

勅語ニ対シ、軍司令官ハ、左ノ如ク奉答ス、

奉答

旅順要塞総攻撃ニ関シ、勅語ヲ辱フス、臣希典等感激恐懼ニ堪ヘス、將卒一般  
深ク聖旨ヲ奉載シ、誓テ速ニ二軍ノ任務ヲ遂行センコトヲ期ス、  
謹テ奉答ス、

本日、予備陸軍砲兵少尉山本徳明ヲ第一中隊小隊長ニ、予備陸軍見習軍医大井  
田正義ヲ第一大隊ニ配属ス、

本日、兵卒六十八名、馬匹五頭補充トシテ着隊ス、

十一月二十四日、久中尉ノ指揮スル第三中隊ノ小孤山小隊ハ、塩廠附近ノ敵砲  
兵ト対戦シ、遂ニ其ノ一門ヲ破壊シ、弾薬庫ヲ爆発セシメ、偉大ノ功ヲ奏シ、地  
区司令官竹内少将ノ賞詞ヲ受ク、

第二節 攻撃実施

対壕作業進捗シ、東鷄冠山北砲台ノ如キ、既ニ其外壕ノ大部ヲ占領シ、今ヤ地  
中戦ノ最中ニアリ、而テ我レ対壕ヲ掘深スレバ、敵ハ対坑道ヲ掘進シ、憂々ノ  
響キ談笑ノ声互ニ手ニ取ル如ク聞フ、斯クテ我軍ノ戦機ハ、日々熟セントシ、  
我帝国ノ上下君民一々憂ヲ旅順ノ空ニ馳ス、此ノ時ニ當リ、第三回総攻撃ノ挙  
アリ、此攻撃ニシテ苟モ成功セザランカ、皇国ノ運命ヤ知ルベキノミ、從テ全  
軍ノ志氣大ニ振興シ、万歳ヲ期シテ決然タル攻撃ニ着手スルニ至レリ、是レガ  
タメ十一月二十四日、左記要旨ノ師団命令ニ接ス、

第十一師団命令 十一月二十四日午後十一時 於大孤山北麓

軍隊区分

一、軍ハ、明後二十六日攻撃ヲ再興ス、

長 前田少将

歩兵第四十三連隊（一中  
隊欠）

騎兵一分隊

山砲兵第六中隊

機関砲第五小隊ノ一分隊

迫撃砲四門

工兵第八大隊一中隊（一  
小隊欠）

山中队区隊

長 山中少将

歩兵第十旅団（四ヶ中隊  
欠）

騎兵小隊長ノ指揮スル半  
小隊

機関砲第七、第八小隊

迫撃砲六門

午後一時ヲ期シ、第一師団ハ、松樹山砲台ニ、  
又第九師団ハ、二龍山砲台及東西盤龍山砲台ノ  
前面囲壁ヲ奪取シ、然ル後逐次松樹山砲台南方  
高地ヨリ毅後軍副營北方高地及望林台ノ嶺頂ニ  
巨ル間ヲ占領スル筈、  
特別予備隊（歩兵六大隊、工兵一小隊）ハ、水  
師營附近ニ、軍ノ總予備隊タル第七師団ノ大部  
ハ、曹家屯ニ位置ス、  
攻城砲兵ハ、明二十五日ヨリ破壊射撃ヲ行ヒ、  
殊ニ東鷄冠山砲台ニ対シテハ、我攻撃部隊ノ該  
地ヲ占領スル迄、絶ヘス之ヲ砲撃ス、  
二、師団ハ、先P堡壘ノ前面東鷄冠山北砲台、Q堡  
壘及東鷄冠山砲台ノ中腹散兵壕ヲ奪取シ、然ル  
後逐次ニ望台ノ東側斜面及□、M、N、R並ニ  
東鷄冠山砲台ヲ占領セントス、  
第九師団トノ地区境界ハ、五家房P堡壘 ト盤  
龍山東砲台トノ中央、望台ノ東腹ニテ、嶺頂ヨ  
リ約百米突ノ地点及望台東南ノ谷心ニ通スル線、

<p>工兵第十一大隊第二、第三中隊</p>	<p>三、前田地区隊ハ、午後一時ヲ期シ、P 堡塁前面郭ニ突入シ、然ル後望台東側斜面ヨリ旧囲壁ニ巨ル間ヲ占領スベシ、</p>	<p>野戦砲兵第十一連隊(第三、第六中隊欠)</p>	<p>集合スベシ、</p>
<p>新山地区隊 長 新山大佐</p>	<p>四、山中地区隊ハ、午後一時ヲ期シ、先北砲台及Q 堡塁ヲ奪取シ、然ル後<sup>Jカ</sup>、M、N 高地ニ向ヒ攻撃ヲ続行スベシ、</p>	<p>四十七密速射砲隊 長 吉川少尉</p>	<p>十、衛生隊ハ、正后迄ニ南北王家屯中間各地ニ、又臨時衛生隊ハ、五家房東北凹地附近ニ開設スヘシ、</p>
<p>歩兵第十二連隊(第一大隊欠) 歩兵第四十三連隊ノ一中隊</p>	<p>五、新山地区隊ハ、午後一時ヲ期シ、東鷄冠山砲台中腹ノ散兵壕ヲ奪取シ後、該砲台及R 砲台ニ向テ攻撃ヲ続行スヘシ、 東南砲台ニ対シテハ、一部隊ヲ以テ有力ナル攻撃動作ヲ行ヒ、機ニ乗シ為シ得ル限り敵塁ノ奪取ヲ勉ムベシ、</p>	<p>予備隊 歩兵第十旅団ノ四中隊 騎兵一分隊 工兵第十一大隊本部並ニ第一中隊ノ一小隊</p>	<p>十一、第二野戦病院ハ、正午迄ニ北部王家屯西方凹地附近ニ開設ノ準備ヲナスベシ、 十二、歩兵彈藥一縦列ハ、午後三時迄ニ大孤山北麓附近ニ前進セシムベシ、</p>
<p>騎兵小隊長ノ指揮スル一分隊 機関砲第六小隊 迫撃砲七門 工兵第十一大隊第一中隊(一小隊欠)</p>	<p>六、竹内地区隊ハ、前面ノ敵ニ対シ、有力ナル攻撃動作ヲ行ヒ、機ニ乗シ為シ得ル限り敵塁ノ奪取ヲ勉ムベシ、</p>	<p>工兵第八大隊第一中隊ノ一小隊</p>	<p>十四、予ハ、正午ヨリ大孤山西北斜面上ニアリ、攻撃ノ進捗ニ伴ヒ五家房東南約六百米ニアル閉塞曲線ノ高地ニ至ル、</p>
<p>竹内地区隊 長 竹内少将 後備歩兵第八、第三十八連隊(各一大隊欠)</p>	<p>七、前田地区隊ハ、第九師団ノ左翼ト連繫シ、其ノ他ノ地区隊ハ、逐次右方地区隊ト連繫シテ動作スベシ、</p>	<p>備考 歩兵第十二連隊ノ第一大隊(二中隊欠)ハ、軍ノ特別予備隊トナリ、二十五日ヨリ歩兵第二旅団長中村少将ノ揮<sup>レ</sup>指下ニ属ス、</p>	<p>注意 一、各地区隊ハ、陰蔽シテ準備陣地ニ就クヲ要ス、 二、午後一時、東鷄冠山北砲台ノ胸牆ヲ爆発ス筈、</p>
<p>山砲兵第三中隊 機関砲第五小隊(二分隊欠)</p>	<p>八、野戦砲兵隊及四十七密速射砲隊ハ、別紙略図(略ス)ニ依リ、師団ノ攻撃ヲ援助スベシ、</p>	<p>二十六日、約千八百発ノ彈藥補充アルノ通報ニ接シ、連隊段列ニ在リシ彈藥悉皆ヲ二十五日中ニ分配シ終レリ、依テ各中隊ノ彈藥ハ、一門ニ付、平均九十一発トナレリ、是ヨリ先キ第六中隊ハ、一ノ戸堡塁ニ、第二中隊ノ安部小隊ハ、</p>	<p></p>
<p>野戦砲兵隊 長 深堀中佐</p>	<p>九、予備隊ハ、午前十時迄ニ南部王家屯北方凹地ニ</p>	<p></p>	<p></p>

新山地区隊二属シテ、敵前数百米ノ地ニ放列ヲ布置シ、以テ突撃ノ直接援助ニ任セシメタリ、

二十六日朝来、重砲兵ハ、砲撃ヲ初メ、午前十時三十分頃ニハ、稍々猛烈トナレリ、我方連隊及野砲大隊ハ、午前九時ヨリ予定ノ目標ニ向ヒ榴弾及榴霰弾ヲ以テ、徐々ニ射撃ヲ実行シ、以テ午後一時ニ至ル、

午前九時四十五分頃、白銀山北砲台及東鷄冠山東南砲台ノ敵砲兵ハ、猛烈ニ第一大隊及野砲大隊ノ陣地ヲ砲撃シ、為ニ若干ノ死傷ヲ生シタリ、殊ニ野砲大隊ニ於テハ、砲車一門全ク破壊セラレ、将校二、准士官一、重傷ヲ負ヘリ、

午後一時北砲台胸牆爆發スルヤ、塵煙天ニ漲リ、其光景噴火山ノ如シ、次テ我突撃隊ノ攻撃前進ヲ初ムルニ至ルヤ、全砲兵ハ、極力射撃速度ヲ増加シ、且漸次射程ヲ延伸シテ、友軍ノ突撃ヲ容易ナラシメタリ、

午後一時三十五分、Q砲台ニ突入セシ我歩兵ノ退却ヲ初ムルヤ、該堡塁内ノ敵ハ、全身ヲ現ハシテ、我退却スル歩兵及攻路内ニ在ル友軍ニ向ヒ、猛烈ナル追撃射撃ヲ加ヘ、且堡塁ノ両側ニ在リシ各二、二門ノ火砲ヲ以テ、北砲台胸牆上ノ我突撃歩兵及新山地区隊ノ突撃隊ニ向ヒ、盛ニ砲撃加ヘシヲ以テ、第二大隊ヲシテ是等ノ敵ヲ制圧セシメ、以テ石原地区隊ノ突撃ヲ準備セシム、

午後一時五十分、新山隊ノ突撃部隊ハ、東鷄冠山中腹散兵壕ノ一部ヲ占領シ、漸次其両側ニ占領地区ヲ拡張スルヲ見ル、此ノ時ニ當リ、敵ノ歩砲兵ハ、東鷄冠山砲台東南ノ稜線上ニ現出シ、盛ニ新山地区隊ヲ射撃スルヲ以テ、第一大隊及安部小隊ハ、極力之ヲ制圧ニ努メ、遂ニ敵ノ小口経砲一門ヲ破壊セリ、

午後二時四十分頃、Q堡塁ヨリスル敵ノ銃砲火漸次衰フルヤ、第二大隊及野砲兵大隊ハ、日砲台ヨリ望台ニ互ル敵ノ歩砲兵ニ向ヒ、猛烈ナル射撃ヲ加ヘ、以テ前田地区隊ノ危急ヲ援助セリ、是レ此時機ニ於テハ、此方面ニ於ケル敵ノ銃砲火熾勢ヲ極メ、前田地区隊ノ損害慘憺タルモノアリタレハナリ、

此ノ時ニ當リ、北砲台ノ胸牆上ニ於ケル彼我ノ歩兵ハ、爆薬ヲ投シ、接戦格闘、互ニ全力ヲ尽シテ尺サノ土ヲ争ヘリ、依テ野砲兵大隊ヲシテ之ヲ援助射撃ヲナサシメタリ、

午後三時、約一縦列分ノ弾薬ヲ受領シタルヲ以テ、之ヲ各中隊ニ配当ス、一旦

占領シタル東鷄冠山中腹散兵壕ハ、其東側通路ヨリ敵ノ猛烈ナル逆襲ヲ受ケ、其勢決然トシテ当ルヘカラズ、依テ第一大隊ハ、極力之ヲ制圧ニ努力シ、多大ノ損害ヲ与ヘタルモ、敵ハ我砲火ニ顧慮スル所ナク、銃剣ヲ以テ遂ニ我友軍ヲ其山脚ニ撃退シ、再ビ該散壕ノ主人公トナレリ、

午後四時頃ヨリ、山中地区隊ハ、攻撃復行スル予定ナリシヲ以テ、連隊ハ、絶ヘス緩徐ナル射撃ヲ以テ、之ニ声援ヲ与ヘシモ、日ハ漸次西山ニ没シ、四面漸ク暗憺トナリシヲ以テ、屢弾薬ノ節用ヲ顧慮シ、射撃ヲ中止セリ、

時二午後六時四十分  
此ノ夜、有名ナル白襪隊ノ夜襲アリシモ、終ニ何等得ル所ナクシテ多クノ損害ヲ生シタリ、

十一月二十七日、次ノ師団命令ニ接ス、

第十一師団命令 十一月二十七日午前七時五分 於王家屯師団司令部

一、軍ハ、今朝ヨリ砲撃ヲ続行シ、更ニ突撃ヲ実施ス、

二、師団ハ、砲撃ノ成果ヲ得テ、先北砲台ヲ奪取セントス、

三、山中地区隊ハ、砲撃ノ成果ヲ得テ、北砲台ニ突入シ、之ヲ奪取スヘシ、

四、前田地区隊ハ、前項ノ突撃ヲ援助スヘシ、

五、新山地区隊ハ、現在地ニアリテ牽制動作ヲナスヘシ、

六、野戦砲兵隊ハ、此ノ攻撃ヲ援助スヘシ、

此ノ命令ニ基キ、連隊ハ、射撃実施ニ関スル命令ヲ下シ、朝来砲撃ヲ続行シタルモ、師団諸隊ハ、損害著大、殊ニ其ノ成効ノ基礎ト云フヘキ北砲台爆破成績充分ナラサリシヲ以テ、遂ニ突撃ヲ復行スルニ至ラスシテ、更ニ左ノ命令ヲ受領セリ、

第十一師団命令 十一月二十七日午後三時三十分 於北部王家屯南方高地

一、軍ハ、本日午後六時ヲ期シ、第一及第七師団ノ各一部ヲ以テ、203高地ヲ攻

撃ス、

二、師団ハ、現在ノ姿勢ヲ維持シ、成シ得ル限り攻囲作業ノ進捗ヲ図ラントス、

三、各地区隊ハ、従来ノ方針ニ基キ、攻撃作業ヲ継続スベシ、

四、爾余諸隊ノ任務、位置従前ノ如シ、



其ノ他略ス、十一月二十七日、第三中隊ハ、全部直接陣地ニ進出シ、爾他ノ中隊モ多クハ半遮蔽ノ線ニ進出セリ、是レ敵砲兵ノ威力漸次減退セント、彼我接近シテ精密射撃ノ必要ヲ認め、往々十二米五十ノ夾、又濶度ヲ採用スルコトアリタレバナリ、十一月二十八日以後、数日間第一、第七師団方面ノ攻撃ヲ容易ナラシムルタメ、屢々威嚇射撃ヲ実施セリ、

十二月五日夜、203高地ヲ確実ニ占領シタル通報ニ接シ、全軍ノ志氣大ニ揚ル、実ニ我攻圍軍ハ、各方面ノ戦況遅々トシテ進捗セサルヲ見ルヤ、第一、第七師団ノ全部及全軍ノ集成部隊ヲ以テ、十一月二十七日以来、連続203高地攻撃シ、血雨肉弾ヲ放チ、一万有余ノ犠牲ヲ払ヒ、敵モ亦要塞ノ全力ヲ尽シテ防戦シ、有史以来未タ嘗テ比類ナキ苦戦悪闘ヲ交ヘタル後、遂ニ之ヲ攻略シ、茲ニ初メテ攻圍軍ノ運命ヲ開拓シ得ルニ至レリ、今連日ノ戦闘ニ於ケル我が軍ノ死傷ヲ列記スレハ左ノ如シ、

部隊号	死者	傷者	生死不明	計
第一師団	九一八	二四八八	三九二	三七九八
第九師団	五六五	一三九六	五四二	二五〇三
第十一師団	二二八	一三九〇	六八六	二三〇四
中村(白樺)支隊	七二	八〇六	五〇八	一三八六
第七師団	一一一八	三四六七	九二二	五五〇七
攻城砲兵及旅団砲兵	六	七八		八四
計	二九〇七	九六二五	三〇五〇	一五五八二

第七師団ノ如キハ、出征後直ニ殆ント全滅ニ近キ損害ヲ受ケタルコト、本表ニ依リ明カナリ、又以テ悲惨ノ景況ヲ知ルニ足ラン、全軍ノ砲兵ノ消費弾薬左ノ如シ、

榴霰弾 野戦砲兵 一三〇〇八 攻城砲兵 一二〇一五  
 榴霰弾 全上 一三八二二 全上 二九九一  
 計 四一八四〇

之ヲ要スルニ、軍ハ、十一月二十六日ヲ以テ、第三回総攻撃ヲ開始シ、攻撃正面ニ対シテハ、同日ヨリ二十七日ニ亘リ数回勇猛烈ナル突撃ヲ決行シタルモ、約七千ノ戦闘員ヲ喪失シテ、全ク失敗ニ了レリ、而テ此方面ノ状況ハ、吾人ヲシテ暇令幾回突撃ヲ復行スルモ、到底成効セサルヘシトノ観念ヲ抱カシメタリ、是ニ於テカ軍ハ、攻撃目標ヲ変シテ、203高地ニ向ヘリ、十一月二十八日ヨリ十二月五日ニ至ル迄ニ、繰返シタル十数回ノ突撃ハ、再ヒ約七千ノ戦闘員ヲ損傷シテ、漸ク同高地ヲ攻略スルヲ得タリ、

防御司令官「コンドラテンコ」中将ハ、203高地得喪ハ、要塞ノ安危ニ重大ナル關係アルヲ思惟シ、銳意之ヲ防備ニ努力シ、乃チ各水雷艇及砲艦ニ於ケル水兵ノ大部、入院中ノ輕傷患者並ニ義勇隊等極力兵員ヲ全高地ニ集メ、以テ之ヲ支持ヲ期セリ、此ノ如ク露軍ハ、該高地ノ維持ニ腐心セリト雖、日本軍ノ勇敢猛烈ナル攻撃ハ、遂ニ之ヲ支阻スルヲ得ス、悪戦苦闘ノ後、十二月五日午後三時、意ニ之ヲ放棄スルノ止ムヲ得サルニ至レリ、此ノ戦闘ニ於テ露軍ノ損害ハ、実ニ四千六百ノ大キニ達ス、

抑モ203高地ノ奪取ハ、旅順要塞ニ致命ノ大打撃ヲ与ヘタルモノナリ、即チ其攻落後、旬日ヲ出スシテ、絶東ニ雄飛シタル敵ノ第一太平洋艦隊ハ、不名誉ノ全滅ヲ来セリ、是即チ敵方全力ヲ傾注シ、約四千ノ損害ヲ意トセス、頑強無否ノ抵抗ヲ以テ、週余日ノ久シキ克ク輪贏ヲ争フタル所以ニシテ、其ノ戦闘残酷ヲ極メ、互ニ奮闘シタル彼我ノ勇士方肉鬩ケ、骨飛ヒ、四肢頭足其ノ処ヲ異ニスルノ状惨絶、吾人ヲシテ哀情極メテ壮快ヲ覚ヘシメタリ、嗚呼餓渴ヲ忍ビ、困苦ニ耐ヘ、勇戦奮闘、旬日ニ亘リ能ク萬難ヲ排シテ、其ノ任務ニ尽瘁シタル我將校士以下卒ノ忠勇ハ、能ク天神地祇ヲ感泣セシメ、將ニ一変セントシタル運命ヲ再転シテ、全軍ノ作戦ヲ有利ナラシメタリ、吾人ハ、此ノ戦闘ヲ以テ、単ニ203ナル一高地ヲ奪取トセスシテ日露戦争勝敗ノ岐分点タル大関門ノ争奪ト觀察セスンハアラス、即チ波羅の艦隊ノ絶東ニ現出セサルハ、其ノ間接ノ功ナルベク、我海軍ノ安固ナル旅順要塞ノ陥落ヲ速カナラシメタルトハ、直接ノ功ナク、其影響スル所実ニ夫レ此ノ如ク大ナリ、戦死者ハ以テ九泉ニ嘖スヘク、負傷者ハ以テ瘡痕ヲ慰スヘク、生存者ハ以テ自ラ快トスルニ足ルヘシ矣、